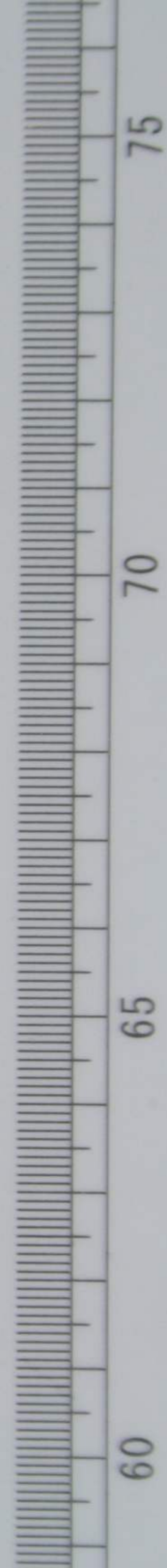
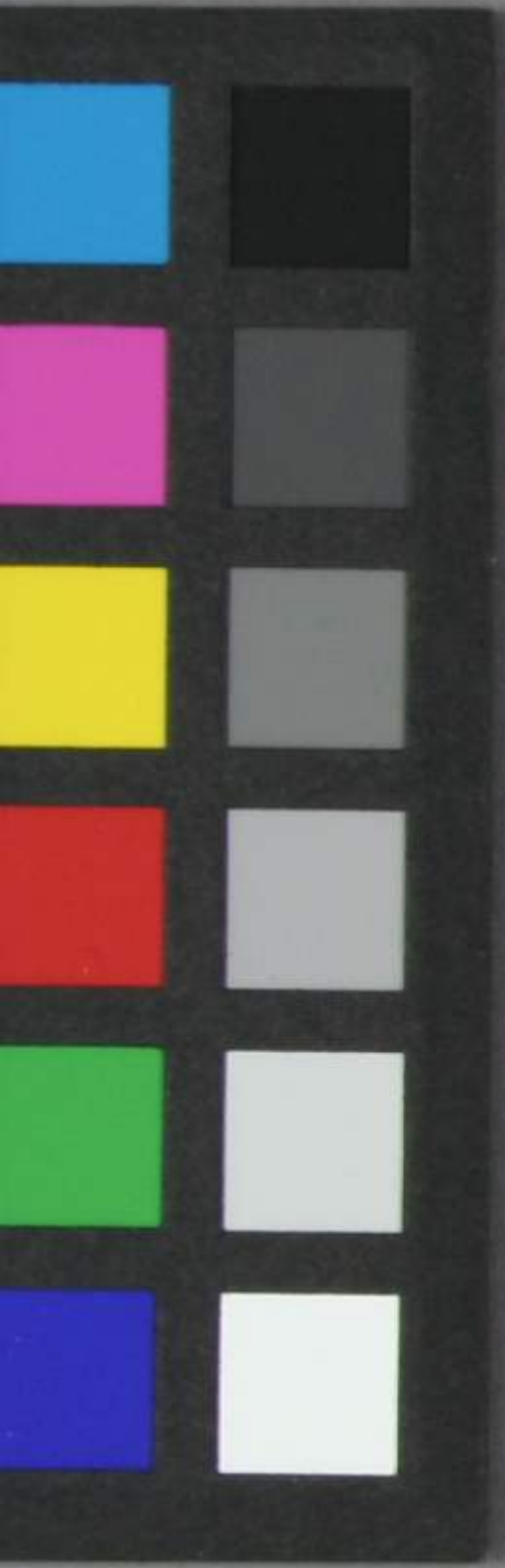


習作  
散文詩集  
七十二篇  
福永挽歌著



東京  
岡村盛花堂

1912



習

作

福永挽歌

櫻吹

和名詩

歌人支侍

中村長之

夜多しは群にほらぬ  
あまの  
あまの  
あまの  
あまの



習作

幸福

を求めむ  
もの詩



集詩文散

作習

篇七十二

歌挽永福

福幸  
るむ求を  
詩のもの

\*\*\*

京東  
堂花盛村岡  
年二十百九千

故土肥朝子様に献ぐ

われ觀るに日の下に一つの憂ありこれ  
は人の中に恒なるもの也——傳道の書

甦れる記憶

—序に代ふ—

私はたゞ獨りプラットホームの腰掛ベンチに倚もたれて最終の列車を待つてゐた。驛えきの構内こうないにある大時計は午後十二時を示してゐる。人影ひかげは誰たれも見えない。時々木枯こかしは恐ろしい響ひびきを立



て、附近の野を無遠慮に荒れ廻る、けれども構内だけは柱燈の火さへ瞬かめ程静かであつた。その静かな深更の空気の中に電信機の響が鮮かに高く鳴つて、青い信號燈が寂しく私の心に望んでゐる。

(2)

火輪の響が轟々と地響して聞えた。瀧關車は黒い烟を吐いて、私の目の前を過ぎた。け

れどもプラットホームには人影が見えなかつた。静けさは前のやうに停車場の中に充ち充ちてゐた。

聴て瀧車は恐ろしい勢で走り出した。木枯は暴れ狂ふて、黒い烟と一緒に此の悪文明の怪物を自分の強い腕の中へ捲き込もうとする叫喚怒號の響は天と地とに漲つた。

けれども瀧關車はこれに反抗して、野の中

(3)

をひた走りに走った。私はこの列車の中にただ獨り寂しく乗つてゐた。さうしてその喧騒と恐怖とに耐へずして幾度かこの列車が何物にか衝き當つて壊れ、ば宜いと思つた。瀧關車か赤い火を吐いて野の中央で粉微塵に壊れる。私の頭蓋骨も粉微塵になつて飛んで了ふ。「記憶を碎け、記憶を碎け！」と私の心の中で激しい慾望が微かな叫び聲を擧げる。

(4)

活動寫眞のフィルム一枚は、夢よりも朧るげに、人生の行路の變轉よりも尙速かに過ぎ去つた。

私の身体は、とある不思議な殿堂の中に横たへられてゐた。四方の壁には物凄く象徴的な繪畫が張りつけてある。何處からか鐘の音が響いて来る。眼に見えぬ小さい、鬼のやう

(5)

な怪物が無数に飛んで来て、四方八方から私の身体を責め、私が苦み跪かうとすると、殿堂の高い天井から嚴肅な力のある聲で呪咀の祈禱が始まる。

暗黒は十重二十重に私の身体をとりまいた。その暗黒の中で、私の眼は微かに微かに開いて、眼前に小さい人間の身体が動くのを見た。それは私が平素から氣にかけてゐる不具の

(6)

幼兒であつた。私の小さい弟であつた。彼は白い眼をして私を隣の部屋に導いた。さうして慄へながら「此處に兄さんの帽子がある」と云ふ。

此處にも闇の中に微かに動く人の姿が見える。それが私に反いて家出した不幸な弟であることを知つた時に、如何に私は彼の運命を悦び且つ悲んだか。

(7)

彼はもう物言ふことが出来なかつた。彼は深い負傷に悩んでゐた。彼が静かに指さす床の上には菰に包んだ小さな死骸が横へられてゐた。カタストロフは直ちに私の心臓を衝いた。「あゝ終に……終に……」——私にも物言ふことが出来なかつた。それは弟が抱いて逃げた愛する女の死骸であつた。私は動哭して、堅い床の上に倒れた……

(8)

呪咀の祈禱は殿堂の高い天井に響いてゐた。

んては夢であるが、凡てのものは夢のやうに過ぎ去るのか？

(9)

「否！ 否！」強い否定の聲が何處からか聞えた。不圖見るに、扉を堅く閉ざした密室の中には、一本の蠟燭が明るく燃えてゐる。夜は恐るべき力を以て更けて行く……

密室の中には、寂寞が無言の涙を交へて無際  
限に擴がり、青く淀んだ沈黙の海の底には、  
幾度も慰められ、救はれ、瞬間の法悦に誑ら  
れて、遂に押へつけられて了つた心が、恨を  
呑んで潜んでゐる。

蠟燭の火は消えんとする前に瞬いた。私が  
涙に泣き濡れた顔をあげた時に、たゞ一つの  
記憶が心の中に甦つた。

(10)

それは純朴な太古に見るやうな、長閑な、  
美はしい野の曙であつた。野の端れには、一  
條の鐵道線路が長く走つて、緑色の低い丘の  
影に呑まれてゐる。鐵橋の下には小河の水が  
ゆるく流れて、朝霧がすっかり晴れると、空  
に漂ふ白い雲の片をその水面に映じて、兩岸  
の畑の中には頻りに小鳥が囀つてゐる。  
丘の上には陸軍測量隊の建てた、高い測量

(11)

臺が立つてゐる。その臺の上の赤い三角旗が  
静かに目覚めゆく朝露の冷やかな空氣の中に  
揺れてゐる或る朝、小河の兩岸に多勢の人が  
集まつてゐた。

兩岸から、歡喜の讚美歌が漲り起つた。敬  
虔なる信徒たちはいつれも皆泣いてゐた。

「きーみに……………むつぶ……………この日ぞう  
れしき……………」

(12)

合唱の聲が消えると、白衣を纏ふた尊敬す  
べき豫言者は河の中流に、腰まで水に濡れて  
立つてゐた。

豫言者の後には同じ白衣を纏ふた青年と少  
女の二人が續いて、同じやうに河の中流に立  
つた。

(13)

「きーみに……………むつぶ……………この日ぞう  
れしき……………」

合唱は再び起つた。兩岸の信徒たちは感謝の涙にむせんだ。古い宗教は新らしく彼等の心の中に甦つた。彼等は酒に酔ふた様になつて「天忽ち之が爲めに開け、神の靈の鳩の如く降り来る」を見た。

(14)

けれども眞の豫言者は河の中に立つてゐたか兩岸の群集の中か或は鐵橋の下に俯首れて悶えてゐたかは、誰れも知らなかつた。何故

なれば凡ての人は皆豫言者であつた。憫める者は誠の神であつた。兩岸の優しい青草の中に天の恵は陽炎のやうにもえ、測量臺の赤い三角旗は人間の心を以て揺れてゐる。さうして低い丘の緑色の木陰には何人も否むことの出来ぬ一脈の悲哀が流れてゐる。

(15)

見よ、見よ。

青年は老いたる豫言者に抱かれて水の中か

ら浮上<sup>うきあが</sup>つた。彼の心は感謝<sup>かんしや</sup>に充<sup>み</sup>された。何が  
故<sup>ゆ</sup>であらう？

見よ、見よ。

青年<sup>わかもの</sup>の愛する少女の長い髪<sup>かみ</sup>は小河の水に濡<sup>ぬ</sup>  
れ、その白い衣<sup>かみめ</sup>は鷗<sup>かもめ</sup>の羽のやうに輝<sup>かや</sup>いた。彼  
の女は情熱と歡喜に充<sup>み</sup>されて「君に睦<sup>むつ</sup>ぶこの日  
ぞ嬉<sup>うれ</sup>しき」を何遍<sup>なんべん</sup>も心の中に繰返<sup>くりか</sup>へした。彼の  
女は果<sup>は</sup>して何者と睦<sup>むつ</sup>んだのであらう？

(16)

けれども人々は皆愛<sup>あひ</sup>の炎<sup>ほのほ</sup>に燃<sup>も</sup>えてゐた。凡<sup>つま</sup>  
てのものは限りなき平和に包<sup>つ</sup>まれてゐた。

記憶<sup>きおく</sup>は甦<sup>よみがへ</sup>つた。闇<sup>やみ</sup>の底<sup>そこ</sup>から甦<sup>よみがへ</sup>つて美<sup>うつく</sup>はしい  
赤<sup>あか</sup>い花を開いた。  
(17)



目次

第一篇

痛ましき人々の時季.....	一
夕照.....	二四
花壇.....	二六
午後五時.....	二〇
伶俐な蜘蛛の子.....	二六

郵便局の小窓へ	二六
勞作よ、追憶よ	三二
色彩の死	三五
深緑と九星	四七
新らしい不可思議	五一
小牛と巴旦杏	五四
祖父の詩	五九
六月の雨	六六

(2)

さよなら、市街よ	七三
銀杏の緑葉	七六
煙草	八二

第二篇

少年と羅生門の礎	八八
夜會の果つるまで	九六
海の彼方の夜	一〇七
北國に歸る少女	一三二

(3)

第一篇

墓場……………一四二

第三篇

未明の蟋蟀……………一五九

雲降る日の哀傷……………一七〇

月光と少年……………一七九

望樓……………一九八

南の孤島へ……………二二三

悲愁……………二三三

痛ましき人々の時季

柔らかない緑色の彩つてゐた。享樂の小路が、いつしか  
消えて、少女の頬を撫でる心地よい風は、行くべき徑を  
失つた。

空の色が澄みきつて、村落と林の黄昏は、ひやゝかに  
涙を流し、氣象臺の森の梢に秋の冷たさと黄色とが、う

つりゆく時を悲しんでゐる。頭髪の白い、零落れた老人が、朽ちかゝつた黒い齒の痛みに耐へかねて、おびえながら、見知らぬ家の水口の戸を開けて、薬と水とを乞ふてゐる。老人は、海に遠い中仙道の小さな村に生れたといふ。さうして、私の最も嫌いな『過ぎ來し方』を悲しげに物語る……。

久しく寂しい花をつけてゐた、カンナの莖さへ枯れた。私は、愛する草花の枯れて行くのを見るに耐へぬ。けれども、私の寂しい生命は秋の來るのを讚美してゐた。秋は絶望者の慰藉である。・ SUFFERING IS

ONE VERY LONG MOMENT : —かう叫んだ人の

遣るせない悲しみが、しみる味はれる。カンナは枯れて、痛ましき人々の時季が來たのである。さうして私はニコチン中毒のやうにこの時季を愛する。生未明は、果敢ない吐息をつき、死の黄昏は、凡ての捉へ難い夢を振り落して、喘ぎ苦しむ。私は『治癒』といふこと

を知らぬ醫者である。

秋の夕暮の寂しさ、秋の野草の果敢なさ——かういふことは昔から多くの詩人によつて歌はれた。けれども、その多くの詩歌は、私にとつては、見馴れぬ夢であつた。自然は夢を憎む。秋の青空は、涙を誘ふやうな苦痛と慰藉の音楽を奏でる。行くべき家と、歸るべき故郷とを持たぬ人々は、その情けない音楽の破れた調子を聴くために、何處ともなく秋の野に、野末の草に荒

廢せる草園に、遣ひ歩るく……。

私もそれ等の人々と同じやうに、痛ましき時季が來ると、秋の野を遣ひ歩るく一人である。日暮れ前の暫時を、郊外の鐵道線路の上に立つて眺めると、雑木林に連れる丘の麓に建てられた癩療院の白壁が見える。その白壁に秋の名残りの夕日が黄金の虫のやうに匍ふてゐる。『秋の末の方』とか『天刑病者の美はしい娘』などいふ詞は、如何に私の胸に快く響いたやらう。

否、實際その癩療院には、美はしい少女がゐた。その少女は教育といふ貴い——さうして莫迦々々しい財産を持つてゐた。葡萄の實は爛熟して、はびこれる雑草の上にポトリ／＼落ちた。悪性な蜘蛛は匍ひ上らんとして何遍も落ち空しき努力をついけてゐる。天刑病者の娘は、時々ぼんやりと夕日の中に立つて、それを凝視めてゐた。その娘の横顔が何だか自分の妹に似てゐるやうで、私は愕然として歩みを停めることがあつた。私の峻厳しい自覺と反省の鋭き小刀は、いつ

も病み衰へて怨めしげに泣く妹の骨を削りつゝあるから——。

黄ろい晩秋の光のうちにあつて、濃緑の喜びの色を  
想望することを休めよ…… “SUFFERING IS ONE

VERY LONG MOMENT”

この自由なる牢獄のうちに囚はれてゐる人々は、黄  
ろい光には耐へられぬやうな朽ち果つる肉體を持つ

てゐながら、止み難くして終に來るべきこの時季を待つてゐた。彼等は決してよく人の好んでいふ『嚴肅』ではなかつた。彼等は墮落した清教徒のやうであつた。少女の皮膚と軟い吐息とは、淫らな心を掻き亂した。終には、思ふまゝに、淫らな肉の樂みを野獸のやうに貪り吸つた。けれども、彼等は、時々永い眠りから覺めたやうに、落葉の中に建てられた、小さな禮拜堂によるめきながら入つて行つて蹲く。

禮拜堂は丘の麓にある。夕日が窓の色硝子に輝くと、堂の中は、様々の色彩で彩られてゐた。小さい扉を開いて戶外に出ると、落葉の黄色は、その衰へた身體に廊下の縁に、弱い光を反射して、彼等をして歸るべき道に迷はしめた。

時々雨が降ると、丘の木葉は、一時に凋落して、冷たい地上に降り注いだ。罪人の痛ましい感激のやうに、落つる梧桐の葉、櫟の葉、栗、漆、櫨の葉、雜木の葉は、風に煽られて禮拜堂の周圍を駆け廻る。



かゝる時、彼等は泣き、苦しみ、腕きさうして呻くやうに叫んだ：“AH! ALMIGHTY——”

秋の野は何處まで逍遙ふても、同じ色彩と、同じ音楽響とを私の心に傳へる。

私はある場末の町を通り過ぎて、けふもまた野に出た。

村端づれにある外國人の住家がある——外國人と

言つても、われ々と人種を同うする近い國の若い留學生である。住宅を廻らす庭園は廣く、雜草の茂るに任せてあつた。泉水の水に亂れ浮いた黄ろい木の葉は、秋の心を語つてゐた。庭園にも住宅にも、絶えて裝飾といふものが見られなかつた。

私は何心なく通り過ぎやうとして、ふと立停つた。

——寂しい庭園の四阿で、聞き慣れぬ珍らしい樂器の音が、低く響いて來たからである。

二十五絃であらうか。否々、その調子のうらぶれて如何にも低い音色をひたかすのは、ギターに似たその國の古い樂器であらう。

秋の野末に外國の人を見ることは耐へ難い。殊にその國の憐れな樂の音を聴くともなしに聴き惚れてゐる私の心には、憂愁が涙のやうに湧きいづる……。

あゝ、それは『アラ、ンの歌』である！

女は悲し氣に、『アラ、ンの歌』を口ずさんでゐるの

だ。私は、この國の人が昔から『アラ、ン』と稱する亡國の歌を唄ふといふことを聞いてゐた。刺繍した衣服を着てゐる女——その女は、荒れ果てた庭園と、木の葉の凋落を弔ふために、この歌を唄つてゐるのであらうか。女は悲んでゐる。その憂ひに瘦せた蒼白い顔を池の水に映して、終日、廣い窓に倚れてゐる。樂の音は低く響く。痛ましき人々のために……。

夕照

玻璃窓を染め、窓掛に影を映す、夕照の赤い色よ。

外には嵐が狂つてゐる。赤い嵐が狂つてゐる。雨を呼ぶことに絶望した風と、静かに巢に歸る、青い小鳥の戀を見失つた夕陽とは、盡きせざる悲みを訴へるために森と、枯野と、ガタ馬車と、一里塚と、驛遞の馬小舎の

傍に咲いた、天竺牡丹とを誘ふて狂ふ。汝は何處へ行かうと焦るのか。騒がしい心よ。

嘗つて私は海棠の花の静かに開く朝の寢床の上に打伏して、海と、戀人の消え去らんとする夢を追ふて、歎きしたことさへあるのに。

玻璃窓が、ガタ／＼と鳴る。  
私の視神経は、痺れてゐる。

花壇

霧は、温室の白い壁に、しづかに慕ひよる。未明の花壇に、だゞ獨り目醒めしものよ。

白いエープロンの園丁の娘の姿が、憂れはしげに、淡紅色のカトシアの花かげから、見え始めぬ間よ——風を怖れる蠅取草は、美はしい羽虫の屍骸を抱いて、眠つ

てゐる。色濃やかな、櫻草の寢床を抜け出た黄金虫は、寢ぼけ顔して、朝霧の中にさまよひ出た。さうして彼の女は、濃い紅色のチュエーリップの花弁にとまつて、温い同衾の追憶から、たゞひとり目醒めてゐる。

黄金虫は、ほど遠からぬ花壇の彼方に、青葉の神苑があることを知つてゐる。

そこには、花欄といふ樹が、カソリック教の僧侶の衣のやうな崇高い花をつけてゐる。

嘗つて、その神苑を通り過ぎた、若い畫家は、神殿の原

始<sup>ま</sup>的<sup>し</sup>な建<sup>た</sup>物<sup>ぶつ</sup>を見<sup>み</sup>て、彼<sup>かれ</sup>の小<sup>ち</sup>さいス<sup>ス</sup>コ<sup>ツ</sup>チの帽<sup>ぼう</sup>子<sup>し</sup>を脱<sup>ぬ</sup>いで頭<sup>あたま</sup>を垂<sup>た</sup>れてゐた。

園<sup>えん</sup>丁<sup>てい</sup>の娘<sup>むすめ</sup>よ。咲<sup>さ</sup>き亂<sup>みだ</sup>れた花<sup>はな</sup>壇<sup>だん</sup>に、水<sup>みづ</sup>を注<sup>そ</sup>ぐことをやめよ。黄<sup>こ</sup>金<sup>かね</sup>虫<sup>むし</sup>は、お前<sup>まへ</sup>の來<sup>く</sup>るのを怖<sup>おそ</sup>れてゐるではないか。

あゝ、花<sup>はな</sup>壇<sup>だん</sup>を照<sup>て</sup>らす、最<sup>さい</sup>後<sup>ご</sup>の太<sup>たい</sup>陽<sup>やう</sup>が沈<sup>しづ</sup>まんとするとき、咲<sup>さ</sup>き誇<sup>こほ</sup>らしめよ。

われゝの花<sup>はな</sup>壇<sup>だん</sup>が荒<sup>くわう</sup>廢<sup>はい</sup>して、寂<sup>さび</sup>しいカ<sup>カ</sup>ン<sup>ナ</sup>の葉<sup>は</sup>のみ黄<sup>き</sup>ろく枯<sup>か</sup>れて、濕<sup>しめ</sup>つた土<sup>つち</sup>ともにも、朽<sup>く</sup>ち果<sup>はつ</sup>るときまで。

午後五時

私の静かな心を掻き亂し、私の視覚を、戦慄せしめた夏の日光が、漸く衰へ行き、神経の昂奮した、蝸が鋭い齒で心臓を噛むやうに泣く。死にかゝつた蝸——彼は、半ば壊れた築地の上に、匍ひ寄つて、悲しい聲をあげ、黄昏の薄暗の忍び寄るまで、望みなき一時を、疲れた弱い足

蝸！ 私の恵まれざる魂にとつては、お前だけが貴い精霊である。お前の死ぬる前に叫ぶ悲しい鳴聲は私にとつては、貴い慰藉である。『神秘』はお前の激しい鳴聲の中に流れ、ゆくりなくも叫び出でし、零落の脆い生命は、寄邊のない衰へ行く夏の日光の中に、耐へ難い涙を流す。夢は幾度か、疲れた心の窓を訪ふけれども私は、暖かい眠りに陥ちることが出来ぬ。醒めてゐるのか？ 醒めてゐるといふことが何であらう。唯お

前は、悲しい叫聲をあげて、夏の去るのを告げ私は沈黙  
つて、それを聴いてゐる。

死に滅びゆく魂——それが私にとつて、たゞ一つの  
貴い慰籍である。

教會の鐘は『午後五時』を報ずる。

その尖塔の屋根にも、最後の太陽は、赤い光を投げて  
ゐる。尖塔の影には、新しい多くの建物が、白く晒ら  
されてゐる。そこでは、新しい生活が營まれ、秋の近

づくのも知らず顔に、夜が來れば、華やかな火影が、窓に  
影を映す。

新しい建物！私はそれを憎む。われゝの家は  
古びて、つねに愁ひの雨が降り、私は悪酒に酔ふて、何處  
ともなく漂浪ひ歩く。新しい建物、新しい生營に  
は、いつも醜悪と塵埃とを伴ふ。新しい墓場には  
痛ましい白燈がつねに明滅し、偽れる愛は、蛇の子の如  
くに附き纏ふ。

私は衰へゆく『午後五時』を愛する。

窓を開けば、無縁者の墓は荒廢して、誰も訪れる人の  
無いのを悲しんでゐる。そこには青草が茂り、濕つた  
土の上には、金蓮花が咲いてゐる。遠い兵營の硝子窓  
は、傾く日の光をうけて、金色の蟲が匍ふやうに輝いて  
ゐる。

その青草の褥の上に私の戀人は姿を現はして私を  
誘ふ。草の上に身を横たへて、彼の女を抱くときにも  
濕つた黒い髪の毛に接吻するときにも、戀人は、とりと

めもない夢に憧がれてゐる。

戀人は、何故泣かぬのであらう。蝶は日光を怖れ、日  
蔭を慕ふて鳴き、われ等は、無縁者の墓の邊りに茂りた  
る青草の中に戀をする。

私は彼の女を愛する。彼の女の美は、美しい皮膚を愛  
する——何故なれば、黄昏時は近づいて、苦しい生活は  
いま暫し、われ等を見棄てゝゐるから——。

あゝ、凡ての滅びゆかんとするもの……。



伶俐な蜘蛛の子

黒ずんだ櫻の青葉と青葉の透間から白絹のやうな、一  
すぢの日光が、濕つた暗い庭にさしてゐる。

天竺牡丹は、その日ざしから漏れて、庭の片隅に咲いて  
てゐる。

その一すぢの日光を横ぎつて、青葉から青葉へ、伶俐  
な蜘蛛の子は、銀の糸をひいて、蠅や羽虫の來るのを待

つてゐる。

白い絹のやうな光よ——濕つた暗い庭に。

黒ずんだ青葉と、日蔭になつた心の底に、ぼんやりと  
『明日』といふことが浮んで來る。

郵便局の小窓へ

私に老いた憐れな一人の母がある。『何日まで経てば幸福になるだらう』と言つては、いつも涙ぐんでゐる。私は、その母と遠く離れてゐる。

初夏が来ると私の悲哀は、何處ともなく白く乾いた市街の通り、自動車の轍のあと、青葉のそよぐ丘に遣ひ

出る。よる邊なき心は、老いた母の涙をも膚にする。

郵便局の激しい労作の塵埃の中に、黒い事務服を着た少女の群れが働いてゐる。藍色の封筒を持つて、金網の小窓の前に立つ――。

少女の群れの中に、詩を作る友の妹が私を見て笑つてゐる――黒い事務服を着て。

日蔭より初夏の日ざしを思へ。眩ゆい、白い、日ざし

の中を私はいま走つて來た。勞作と日蔭の中にある  
少女よ。日蔭より日ざしを思へ。  
凝つと眼を瞑つて見よ。そこには白い薔薇の花が  
咲いてゐる。  
たゞ眼を瞑むれ。

勞作よ、追憶よ

つねに私が反抗し、私が嘲つてゐる神よ。  
けふも亦、激しい勞作につく前に、汝は私をして美は  
しい追憶と愛の涙に耽る一瞬時、一分間を與へたまふ  
がゆへに、私は心から感謝する。  
悲しい、美はしい追憶の森よ。  
私の老いたる父は、破れた茶色の衣を着けて、兩方の

手に私の兄弟を養はんとする、白い大きな牛乳壺を提  
げて、毎朝、その緑の森の下道を通る。

その森の木の色を變へる毎に、明笛を吹くこと  
の好きな少年の友達の靈魂は、幾つか消えて無くなつ  
た。彼れ等はいくら私が叫んでも、もう再び歸つて來  
ぬ。

その間に幾年かの時が経つた。

嘗つて私は、方の有らん限り反抗したけれど、も汽車  
車の中で衰へた私の魂は、一人の愛らしい少女の眼を  
凝視めてゐた。その大きな、濕ほひのある眼は、今でも  
忘れることが出來ぬ。彼女は、その眼で私を愛した。  
私は魂で彼女を愛した。

消え去らぬ少女の眼と私の魂よ。

毎朝、仕事に行く前に私は小鳥屋の店先に立つて、多  
くの時間を費す。紅色に彩つた鶯の籠や、銀色に塗つ  
た金網の籠に、情深い鸚鵡の顔を見てゐる時に私の心  
は、永久に相逢ふことの出來ぬ、二つの異つたものを追

つてゐる。

いま私の部屋では水仙が枯れてしまつた。その黄  
ろい枯葉を凝視めてゐると、いつしか私の心も部屋の  
中も黄ろくなつてしまふ。あゝ私は黄ろい色に耐へ  
られぬ。けれども仕方がない。それが私の現在だか  
ら。

冷たい壁に昨夕脱ぎ捨てたホワイトシャツがかも  
つてゐる。

### 色彩の死

深緑の陰影は、濃く薄く入り亂れて、揺れてゐた。

女と私とは、重く空を蔽ふた橡の木影に憩ふてゐ  
た。二人は、この時限りなく幸福であつた。草の褥の  
上には、温かな日光が炎え、垣根には、黄と紅の天竺牡丹  
と、ペコニアの花が咲いてゐたからである。

『貴郎は、屹度永生なさると思ふわ。』と女は燃ゆる日

光から眼を反らしていふ、

『さうかも知れない。』

『妾は屹度、天死しますよ。』

『どうだかね。』

女は快く張つた乳の邊りを左の手で押へながら、軽い吐息をついた。さうして、この女の皮膚と艶々した髪とを、この時ほど美しいと思つたことはなかつた。

私達は限りなく幸福であつた。

た。

深緑の大きな椽の葉は、明るい日光を受けて、その細い繊維すら美はしく私の眼に映じてゐる。不圖私の心の中に、不安な緑色の音楽が起つた。それは決してパイプ・オルガンのやうな崇嚴な音色の旋律ではなかつた。

私は、その緑色の底に、私達の戀の死骸が横はつてゐるやうに思つたのである。美はしきもの、凡てが私

に甄せんいて去さる時とき——かゝる刹那せつなの連れん續ぞくが始し終り私わたしの生せい活くわつに附つき纏まとふてゐるのではないかと私わたしは思おもつたからである。

女おんなは、垣かき根ねに忍しのび寄よる日影ひかげと、ベコニアの爛たれた舌したのやうな花辨はなづらを凝視みつめてゐる。

『色彩しきさいの死し』

不圖ふとかういふことを思おもつた時とき、なほ私わたしは橡とらの木きの葉はを凝視みつめてゐた。さうして深緑ふかみどりの陰影いんえいは私わたしの心こころの中うちで、濃こく薄うすく入り亂みだれて搖ゆれてゐた。

橡とらの葉はが薄暗うすぐらく影かげつた。する／＼と迂すまるやうな午後ごの太陽たいやうが傾かたむいたのである。その時ときに私達わたしたちはもう幸こう福ふくではなかつた。

『妾わたしもう歸かへらなきあならない。』と女おんなが言いつた。

『何處どこへ——』

私わたしは斯かう云いつて立たち上あつた女おんなの顔かほを見上みあげた。女おんなはただ黙だまつて、淋さびしく笑わらつてゐる。

日ひの暮くれるのにもう間まが無ない。夜よると闇やみとは私わたしが重おもい足あしを運はんで行ゆくのを待まつてゐる。

女は『ヒューマニティーの牢獄』に歸り行くのである。

女はまだ、『盡きせざる愛の歌』を小聲で唄つてゐる。さうして、二人がもう別れねばならぬといふことを知つた時に、私達は、『少女の墓場』に来てゐた。二人が逢ふ瀬と別れを親しむのは、いつもこの『少女の墓場』であつた。何故なれば私達は老人の死は何ものにも比べることの出来ぬ程醜いものであるといふことを知つてゐたから――！。

そこには、さまざまの美しい墓があつた。墓は花輪と香物とで彩られてゐた。女はその中の一つの大理石の墓を見つけて立ち止まつた。『われ等笛ふけども爾等おどらず哀みをすれども爾等胸うたず』と、墓石の上には聖句が彫りつけてある。

『十七の少女の墓ですよ。』

『男を知つてゐたいらうか。』

『哀みをすれども、爾等胸うたず！ 何だか可哀さうで



すねえ。』

『美しい。』

『沈黙の美でせう。』

『否。たゞ死といふものが美はしいんだ。』

『だつて、貴郎は先刻、「色彩の死」は悲しいつておつしやつたじやありませんか？』

『われ等笛吹けども、爾等おどらず！私達はたゞ夜と闇との來るのを待つてゐるんだ。』

女は黙つて俛首れた。さうして私の傍に寄り添つ

て泣いた。私の心の中には、もう『現在の歡樂』が過ぎてその姿をとめてゐなかつた。

『眩度私も天死しますよ。』と女は、涙を柔かな指におさへながら、小聲に囁いた。その時私達は再び瞬間の幸福を味つた。

夕日は美はしく『少女の墓場』を照らしてゐた。女は私と別れて、『ヒューマニテイの牢獄』に歸つて行つた。

木の葉の緑は、だん／＼闇に近づいた。

空には、星が輝きはじめたけれども、その夜は月光を見ることが出来なかつた。

私はたゞ獨り夜の街を歩いてゐた。至る所の酒場では白粉や紅脂をつけた女が、青い瓦斯の下で男を呼んでゐたけれども、酒も女も、今宵ばかりは、私の心を引かなかつた。

色彩の世界を葬つた私は、光と闇の世界を道ふてゐた。私は酔つてゐた。狂してゐた。けれども、何者にか

か憧れてゐたのである。

私の憧れてゐたのは、『曙』であるといふことを後で知ることが出来た。

不圖眼を開くと、遠い前方には、明るい電燈が點つてゐる。圓い食卓の周圍には、多くの大人や子供が愉快げに笑つてゐる。

街は暗かつた。私は、ある家の一室を垣根の外から覗いてゐたのである。そこでは、晚餐の最中であつた

私は晩餐といふことを思つた。すると急に心臓が緊縮して、笑ひを耐へ忍ぶことが出来なかつた。私は高く笑つた。それは恰度、狂人の笑ひのやうであつた。私の大きな眼には、涙が溢れてゐた。

### 深緑と九星

今日もまた木蔭に来て、水の面を眺めてゐる。

女と追憶には永久に會へない——けれども耐へざる心は消え去つたもの、『美』を追ふてゐる。

日の光を一ぱいに受けた池の表面は、塵一本も浮んでゐないやうに澄み切つて光つてゐる。その光りの上に、岸邊の大きな榛の樹が、たゞ一塊、深緑の濃い影

を落してゐる。

その影は、海の緑の流れよりも、沈静した瞑象を私の心に傳へる。蒼い、その蔭の底にひそむ不可思議なる強い力よ——。

何處からともなく、柔らかな風が吹いて来ると、緑の蔭は細い漣を起して慄へる。物象が深緑の底で身ぶるひしてゐる。

女と始めて會つたのも、この榛の木の蔭であつた。サラ／＼と葉擦れの音が、静かな水の表面に響き渡つ

て、附近の森も、麥畑も、氏神の小さな祠も、言ひ合はしたやうに、黙つてしまふと、女はしのびやかに歎きしてゐた。

女とはもう永久に會ふことが出来ぬ。

過ぎ行かんとする初夏よ。森の青よ。たゆたふ深緑の心よ。

いま私の膝の上には、小さな古い曆が置かれてゐる

稲の穂の吉凶と、人の運命を占ふといふ、黒い九つの

星を凝視てゐた。

不思議ではないか——光りと緑の中にある耐へざる心は、たゞ暫し懶い疲勞れを忘れて、驚愕の眼をみはつてゐる。

### 新らしい不可思議

紅葉の嫩葉に、新らしい木蓮の香を包む四月の日光が流れて私の皮膚が美しくしく乾いてゐる日に私は終日お前を思ふ。

香ふ春の空気の中に、新らしい不可思議が漂よふ。凡てのものゝ響は貴い謎に私を苦める大理石の固い模様を断る、銀の鋸の静かな響を聴け。病み衰へて死

なんとする妹よ。

羅生門の古い礎に近い、埃深い街道を通る荷車の轍の響きを聞きながら、無花果の葉が生ひ茂つてゐる暗い家の中で、甘瓜の香を味はつた少年と少女の夏の夕を、お前は忘れてはならぬ。

喰べることも、兄を思ふことより知らずして、静かに消えて行くお前の魂。

復活祭の日に、アイオニアンの灰色の建物に、色濃やかなな蔦の葉が揺れる時に、私の心は涙ぐんでゐる。さ

うして、お前が『隣の娘のやうな着物を買つて下さい。』

私は電話交換手になりたい。』と言つて、膝に面を伏せて泣いたことを、私は忘れぬ。

いま俛首れて、白壁に對つてゐる。何も見えぬ。たゞ真白い白壁、私は昔、その白壁に、さまざまの追憶や、後悔や、罪悪や、懺悔が記されてあるやうに思つた。それは悲しい幻像であつた。

小牛と巴旦杏

温かい午後の日光は、濃いアルコールのやうに降りそ  
いで。紫色の煙は、静かに香氣の懐しい牧草の上を  
匂うてゐる。

牧場の亜鉛屋根は白く光り、若草の色鮮やかな風い  
野には、七つの牝牛が懶げに群れ遊んでゐる。圍繞ら  
ず白い木柵の傍には、茶と白との斑色の小牛が、重い足

を半ば閉ぢて、眠つてゐる。

ある日私は心の底にひそかに湧いて来る『詩想』とい  
ふものに思ひ悩みつゝ、いつものやうにこの牧場の小  
徑を歩んでゐた。いまこの瞬間に、若し私の心を眞に  
偽らぬ詩といふものを求めるならば、それは何であら  
うか。今何者かは私の心に静かに忍び寄つて、主智主  
情の眼を温かい眠りに誘ふてゐるけれども ECSTA  
SY といふものは、もう既に過去の墓場に葬られてし  
まつたのである。

私の心はその時、懈怠と幸福とに満ちた小牛の睡む  
たげな瞳に凝つと對座つてゐた。大氣は濃い藍色に  
染められて、肉親相姦の血を湧かすやうな恨めしげな  
吐息はひし／＼と私の乾いた皮膚に迫つて來た。私  
の心は、果敢ないものに憧れる『原人』の夢から覺めかけ  
てゐる。呼吸の切迫するやうな空氣の中には、不可思  
議な恐怖と悪魔の靈とが漂ふてゐる。

實をとりため、六人の男の兒が長い竹竿を持つてこ  
の樹の周圍に群れ集まつてゐる。彼等の愕き歇まぬ  
小さい綠色の瞳は晝も夜もこの甘い果實に憧れてゐ  
たのである。

私の心臓は、二三度つゞけさまに激しい動悸を撃つ  
た。何處からともなく耳を澄さなければ聴きとれぬ  
程微かな響がきこえる。その響が不意の驚愕を私の  
心臓に傳へたのである。次ぎの瞬間には未明に沈む



星のやうに果敢ない悲しみが私の心を虜にした。小  
兒の群れが楽しげに叫ぶ聲が、不安な恍惚から私を呼  
び醒ました。

何時の間にか、牧場の小舎の影から、白い上衣に黒い  
ズボンを着けた大男が現はれて、大聲を揚げた。その  
聲を聞くと、小兒等は、HERCULES の力に驚く希臘の  
小さい神々のやうに、竿や箠を地上に投げ捨て、もと

つと眼を瞑ると、眼の前に私の心を眩惑するやうな青  
い映畫が動き出した。

私は強い草いきれを嗅いだ。遠くで牛の鳴き聲が  
聞える。

青い映畫は私の幼時の追憶であつた。  
私が小兒の時分育つた、故郷の家の近所に、一軒の牧  
場があつた。巴旦杏の實が紅く熟して、その樹の下に

は、いつも小牛が眠つてゐる。私が大きな麥稈帽を抱へて、巴旦杏を拾ふために、その傍に近づいても、小牛は決して眼を覺まして私を愕かすやうなことがなかつた。

その頃、この牧場には徳といふ若い男が雇はれてゐた。私が牧場の附近に遊んでゐるのを見ると、遠くから

手招きして私を呼んで、汗の滴るやうな大きな巴旦杏を、日や死なうか、明日の日は……』といふ唄をうたひながら、私の家の附近を道ふたことを覺えてゐる。ある月の冴えた晩、終に二人は謀し合して、私たちの村から駆落した。

二人の戀の行方。

忘れ得ぬ血紅色の果實。

青い映畫は、一瞬時にして消えた。それは私の心を

ECSTASY に導くことが出来なかつた。何故なれば

追憶といふことには、ある苦痛と恐怖とを伴ふから。

牧場の彼方の小徑、濃いアルコールのやうな空気の  
中を、若い畫家がカンヴァスを提げて通つた。その人  
の強い足に、路傍の黄ろい草花は踏みにじられてしま  
つた。

私の心は再び、懶うげな小牝の瞳を凝視めてゐた。

ECSTASY は死んだのである。詩人はもう原人の夢か

心に漂ふてゐる。

私は自然の不可思議に若い胸を踊らしながら牧場の  
小途を過ぎて行く畫家の姿を見送りながら心の中  
に思つた。『私たちは、墓から復活つたラザロの奇蹟に  
思ひを惱ます前に、先づアダムとイヴを恨まねばなら  
ぬ。』

温かい日光は、牧場の白い木棚を照してゐる。

祖父の詩

あざやかな日光に照された街に、華やかなパラソルが動く時に、私の詩は、混沌の陰府から復活する。

底の知れぬ穴から、匍ひ上つて来る獣の心は、嘗つて溪間の順朴な民の美はしい人情を知つてゐた。

虚偽の多い私の口を閉ぢ、汚れた右の手を切り棄てく、男女の靈魂を味はしめよ。

桃の花が咲き亂れて、暮れて行く春の光は、華やかな私の心に汚點の如くに陰らふ。

聽け。婚姻の歌をうたふ、處女の悲し氣な聲が慄へてゐるのを。

祖父の詩集を繙とくまでに、私の心は幾度か躊躇つた。いま限りなき初夏の喜びを、胸にたへて、古風な本箱の中から取り出した、手書の古い詩集は、私にとつ

て決して朽ち果つべき古典のやうに思はれぬ。

私の主観は脆い青磁の甕のやうに、幾度も碎けた。

碎けたる心よ。その痛ましい姿を思ふ時に、悲哀は凱歌を擧げ、貪慾はその牙を磨き、蜜蜂は孜孜として蜂房を営み、牢獄に繋がれた囚人は、冷たい涙に咽ぶ。

桃の花が咲き亂れて、暮れて行く春の光は私の心に汚點の如くに陰らふ。

聴け。婚姻の歌をうたふ處女の悲し氣な聲が慄へ

てゐるのを。

## 六月の雨

麻布の高臺の静寂かなとある町に、昔榮えた棟の高い RESTAURANT がある。昔は宰相の黒塗りの馬車が、この家の前に停つて、銀の鎖に繋がれた白い毛の洋犬が、主人の歸りまで、小さい洋室の暖爐の傍に睡つてゐたといふ。私は、雨の降るある晩、追はるゝ影のやうに、その入口をくゞつた。私の黒い着物と、地味な襟飾とは

この古い零落れた RESTAURANT の空氣に適應つてゐた。

青いマントルの瓦斯が、たゞ一つ點つてゐるばかり——何故、他の燈火は消えたのであらう。古い天井の唐草模様が、薄暗く、私の心を壓してゐる。圓い柱は黒く光つて、部屋の隅に置かれた、棚の上の磁皿やフラスコや、紫色の洋盃や、薄緑の三鞭酒盃には、塵埃がたまつてゐる。食卓掛が濕つぽく光つて、妖魔のやうなウイスキーの香りが漂つてゐる。入口の階段にも、酒場に

も私が酒に酔つて強く食卓を叩くけれども、終に華やかな女は、その笑顔を見せなかつた。さうして、廣い窓の外には、遣る瀬ない六月の霧のやうな雨が降つてゐる。音楽の無いこの家に、山の手の高臺に、雨はしづかに降り注いで、過ぎ逝きしものを吊ふてゐる。

かゝる時、私は過ぎし日愛してゐた、一人の女を憶ふ私はその女をNANAと呼んでゐた。NANAは、小さい丘の上の RESTAURANT の露臺にゐた。それは、白い教會の建物のやうに高かつた。丘の麓には、青葉が茂

つて、黄昏れ時が近づくと、木の間を透ほして見える奏樂堂に、電燈が點いて ORCHESTRA は、外國の優れた作曲を奏でた。私は、その優れた音楽のやうに、NANAの美は、しい頬と、虫喰つた白い前齒と、派手な着物と、彼女の女が勧める、香りの高い洋酒とを愛した。毎晩私は、NANAとももに、露臺の端に出て、圓いテーブルに倚れて、青葉にひゆく、逝きし名作家の、忘れられた一曲に耳を傾けた。

やがて、イルミネーションは消えた。奏樂の響きは

止んだ。薄暗が私の心を虜にした。終にNANAの姿は丘の上の露臺から消えた。

ECSTSYもCLIMAXも鋭く尖つてゐる。私はいまこの昔榮えたRESTAURANTへ私が嘗つて愛したNANAと呼んだ女に會ふために來たのではない。たい廣い窓の外には、六月の雨が愁訴するやうに降つてゐる。さうして、私を照らすのは青白い瓦斯の光りがたゞ一つ……。

### さよなら市街よ

破れた靴と古い鏡と私の好きな聖書と、この三品のものが私の財産であつた。瘦せた顔に、夕日が影をさす。私はいま街端づれから小さな馬車に乗つて何處へか去らうと思ふ。榮え行くこの市街へ私は半年前に來た。雨の降る日でもこの市街は明るかつた。私は幾度か涙ぐんだ



心を抱いて、この市街を往來した。日暮れ時が近づく  
と、高い三層樓の洋館には、電燈や瓦斯が點く。その屋  
根の上には、希望と繁榮を現はした女神像が右の手に  
歡喜の常夜燈を高く提げて夜の市街を照らしてゐた。  
死んだ女神——朽ち果つる女神——私は毎晩のや  
うにこの市街を呪つた。

群集は、大きな煉瓦造りの銀行や、高い白亜の商館や  
古い劇場に集まつて、罵るやうに叫んでゐる。ある日  
私は劇場に入つて見た。そこでは、無智の涙と幼時の

追憶のほか新らしい何ものをも見出し得なかつた。  
劇場の入口——階段の下に、襪襪を着た若い乞食が  
人の袖を引いて憐みを乞ふてゐた。その乞食の賢人  
を嘲弄するやうな、青い瞳のみが、凡てのものに別れ行  
かんとするいま、忘れ難いたゞ一つの記憶となつてゐ  
る。

榮え行く市街は、明るい日ざしの下に眠る小牛のや  
うな無智を追ふてゐた。

六ヶ月の間、市街の喧騒と群集のとよめきは私の心

から神秘と謎とを掻き消した。けれどもいま馬丁が  
吹き鳴らす喇叭の響が寂しく塲末の町にひびき渡る  
まへに、破れた靴も、古い鏡も、私の好きな聖書も、あの高  
い三層樓さへも、私の心に解き難い謎となつた。

さら／＼と青葉に風がさわぐ五月の午後私は海を  
戀ひ慕ふてゐた。さうして、奇麗な藻草と、赤い貝殻と  
鷗の小さい足と、青い浪——静かな海の中に溶けて死  
なうとする若い心を食つてゐた。

——けれども私はいま海に逃げるのではない。

さよなら、榮えたる市街よ。

白い手で、マシマロを賣る私の愛する少女よ。彼の  
女の家の前を私の古い馬車は、喇叭を吹き鳴らしつゝ、  
通る。私はいま、お前にさへ別れて去らねばならぬ。

日暮れ時が近づいた。

私の行くのは、海でも野でもない。莖草の咲く寂し  
い田舎でもない。

さよなら、榮えたる市街よ。

銀杏の緑葉

六月の永い雨が止んで空を蔽ふてゐた、灰色の陰気な幕が切つて落された。その幕の切れ目から、蒼い海のやうな空が見え始めた。

地平線のどん底から、薄くやうな白い雲が覗く――  
『手をかけて、攀ち上れさうだ』と、毎朝空の色を眺めてゐるロマンチストがつぶやく。

公園の噴水塔の邊りで、懶惰と遊女の噂さに、夜の來るのを待つてゐる、遊子の一群れが勢ひづいて、眞夏と白い雲とを讚美する。

朝暎は高くさし上つたけれど、堅く閉ざした部屋の中は薄暗い。梅雨の濕りはまだ部屋の中に満ちてゐる。

扇の鍵に「愛するものよ。永久に忍び入る勿れ」と、小刀の尖で彫りつけて、傷ついた傳道者のやうな心が、夏

の白い日光の輝くのを怖れてゐる。

たゞ一つ可愛らしい窓が開いてゐる——暗い部屋に、小さい、小さい窓。

窓は、暗函のレンズのやうに、突き出てゐる。

窓の外には、白い日光が銀杏の緑葉を脅かす。緑葉が、しづかに揺れる。

— 80 —

銀杏の緑葉が、傾く夕日に育てられて、黄ばむ時まで密閉された心が、哀しみ疲れて、枯れて、行く草園の中に

追よひ出る時まで、蝸が死ぬる前に、緑色の眼に涙をたへて、最後の符節を奏で出づる時まで、夏は、放たれた悦びに、恣まに狂ふであらう。

— 81 —

煙草

私は夏の日光が酷い獣の牙のやうに怖ろしい。東京の市街と、日比谷公園の噴水塔に南風が吹く時の氣味の悪さ！ 私は南風が嫌ひだ。南風が吹かぬと雨が降る。牧場の白く塗つた木柵と、傍の白楊の葉が薄く煙つて、朝から晩まで、じめじめと雨が降る。

雨と煙草とは『無始無終』である。圓形の大きなテリ

ブルに倚りかゝつて、よく乾いた香りの高い埃及を吸ふのが私は好きだ。地上の神々よ。雨が降つても私の煙草の香りばかりは濕めらざらんことを！

南風が吹かずに毎日雨が降る。洪水が溢れ、東京の低い町並を侵したといふ報知が高臺までも傳はつた慈善といふ字の意味を知らぬ私は、ある日洪水を見物に出た。——黄土に赤鐵鑛を交せたやうな濁つた水は、床屋の看板を浸してゐる。町の中央を筏が通る。壽司屋の屋根には水に濡れた女の着物が乾してある。

小學校は授業を休んだ。玉乗りの興行元は額に鉢を寄せた。人々は血眼になつて騒いでゐる。巡查は指を折つて月給日を敷へてゐる。若い女が白い皮膚を出して、その濁つた水の中を徒歩渡りして行く。私は「慈善」が新聞屋の獨専事業となることを心の中で願つてゐた。

その中に、灰色の空から雨がポツリ／＼降り始めたので私は密つと懷中に手を入れて、煙草の濕るのを氣遣つた。さうして、藝術家には同情が必要なのであら

うかと恐る／＼自分の心に尋いて見た。雨が降るのも構はずに私は旨い煙草をスパ／＼吸ひ乍ら裾をからげて水の中を渡つて行つた。「遊んで被在いな！」——甲高い女の聲が突然ある小さな家の二階から聞えた。唇の赤いのと、顔色の蒼ざめた銀杏返しが二人私を瞰下ろして笑つてゐる。二人は雨が降つてゐるのに二階から降りて來て、狭い往來の泥水の中で私の肘を捕へた。驚ろいたことには、二人とも裸體で、赤いものを腰に纏ふてゐるばかり、顔には厚く

白粉をつけて、眼の靡爛れてゐるのが氣味が悪い。

私はこの時程女の裸體に愕かされなかつたことはない。強いて手を振り離して、歸らうとすると「貴様煙草位の持つてらつしやるでせう。妾煙草が買へないんですもの。二三本頂戴な！」と唇の赤いのが云ふ。私は惜しい煙草を懷中から三本とり出して女に與へた。彼等は私の手を直ぐ離して引返へした。

『POOR CREATURE!』——彼等も私と同じやうに、煙草が好きであつた。

『死は綠色!』——靡爛した女は、心で屹度かう唄つてゐるに違ひない。若し彼等が死んだならば私は、彼等の黄ろい墓石に、露に濡れた白楊の枝と、香りの高い煙草とを供へてやらうと思ふ。

第  
二  
篇



少年と羅生門の礎

舊都の街と野とを包む空氣が薄暗く、四月の末に近いある日！

この日は、舊い都に住む少年の華やかな心に、陰鬱な影がさして、數多の寺院で打ち鳴らす鐘の音も、呪阻の響を含むやうに思はれた。

黄金色の菜種の花咲く朱雀野には、壬生寺といふ古

い寺院がある。そこでは、この都の古い慣例の一つである『假面狂言』が演ぜられるといふので、都に住む人々は、永い間この日の來るのを待つてゐるのである。空は薄く霞んで、舊都の春は、孕んだ年増の女のやうに重い吐息をついてゐた。山に近い都の舊跡では、まだ花見や祭禮の騒ぎが絶えなかつた。けれども、荒廢した都の西南の街々には、醒めやすい歡樂の未明のやうな淡い悲みが充ちてゐた。

下鳥羽の小さな村から、舊都に通ずる街道には、朝か

ら人通りが多く、美しい衣服を着た娘達や、青年等が群れをつくつて通り過ぎる。街道の屋並の軒は低く垂れて、重い格子戸の閉された家の中は暗かつた。少年は小さな窓から、街道を眺めてゐた。さうして心の中に『假面狂言』を見に行くのか、それとも、島原に行くのか……』と思つた。

壬生寺の鐘の響が漂ふ野の中の島原といふ遊廓では、この日『遊女の行列』があつた。人の目を奪ふやうな長い着物をきた遊女は、街の中をねり歩くのであ

る。

舊い都の男も女も、この日は朱雀野のさまぐの催しを見るために道を急いだ。

少年の黒み勝ちの瞳には、いつも憂鬱の色が漂ふてゐた。傷ついた鳩のやうな彼れの優美しい心の中に、は、淀んだ春の光りの中で、怪しげに踊る黒い假面と、遊女の長い銀の簪と、その物思はしげな顔とが映じてゐた。

彼は、鳥羽街道に沿ふた、大きな朱塗の門の前に立つてゐた。それは恰度、舊都の街端づれで、寂しい鳥羽野に近い所であつた。五本の筋が入つた茶色の土塀は、街道に沿ふて長く續いてゐた。

門の内には、高く茂つた杉の大木が聳え立つて、四邊を薄暗くしてゐる。その杉の青葉の間から、最も大きな二棟の朱塗の佛殿が横はつてゐるのが見える。

境内の光線は青かつた。一千年前に住んでゐた此の寺の開祖が建てたといふ寶物藏——黒ずんだ古い

フリミチーウな材木で建てたもの——は細長い物静  
な池に遠く隔てられて、この建物の縁の下には、メラン  
コリーな青草が萌え出てゐた。

少年の顔の色は、飽くまでも白かつた。彼れは山に  
近い舊跡の賑ひや、朱雀野の春の催ほしに遠ざかつて  
此の憂鬱な古刹の境内を逍遙ふことを快く思つた。  
何故なれば、その頃彼の心は、此の寺に近い街道に住む  
年上の戀人によつて、痛ましくも傷つけられてゐたか  
らである。

戀人は巾の廣い黒襟のついた派手な着物をきて、大  
きな桃割に赤いテガラをかけた、如何にもこの舊い都  
の戀娘にふさはしい『絲屋の娘』である。

不意に、高い杉の梢で、五位鶯が激しく鳴いた。少年  
が涙ぐんだ眼を上げて、不思議さうに凝つと見上げる  
と、五位鶯は彼の眼の前へ、眞青な美しく卵子を落し  
た。卵子は地上に落ちて碎けた。少年の穩やかなら  
ぬ心は、ゆらくと浪のやうに揺らいだ。

彼方の森の中には、永久に閉ざれた『繪馬の佛殿』があつた。附近の農民は、年に一度、この佛殿の赤黒い扉が開くのを待つて、怪しい運命の吉凶を占ふのである。いまその佛殿は闇い森の中に静まり返つて、時々梟が『夢の神託』のやうな聲で鳴いてゐる。

黒いジャケットを着た一群の中學生が、戯れながら境内を南門の方へ歩みつゝあつた。彼等は南門の彼方なる野の中の中學校へ通ふのである。

少年は中學生の群れから姿を隠くして、人影の見え

ぬ塔の邊りへ急いだ。

五重の塔は、杉の梢よりも高く聳えてゐた。塔の附近には、古い傳説の名残りを留めてゐる、羅生門の礎があつた。

秋になると杉の木が葉が黄ばんで、塔の屋根には鳥が群れ集まるのであるが、暖かな春の日には、風さへ動かず、塔は極めて静寂であつた。

『塔は舊都の夏を知らぬ。春から秋へ移つて行く豫言のやうに立つてゐる。今に秋が来る。秋が来ると

あの風鈴が、高い空でガラン／＼と鳴る。』  
少年は心の中で斯う思つた。古い寺院の森と塔と  
は、幾度も吐息をついた。すると、幻影は『絲屋の娘』の憐  
れな家を包む黒い影になつて、暖かい日光の中を飛び  
廻つた。

黒い影は、寂しい人情と罪惡とであつた。  
五位鷺が激しく鳴いた。

### 夜會の果つるまで

櫻田門に近い、廣い大道りは、深い闇に閉されてゐた。  
寒い風は音を立てずに、兩側の街燈の、蒼白い精靈やう  
な瓦斯の光りを、時々慄はしながら、何處へともなく吹  
いて行く。瓦斯の光りは、幾條も色彩つた霧のやうに  
規則正しく無意味に、闇の空氣の中に流れてゐた。  
魂を抜かれた罪人の黒い死骸のやうに、司法省と大

審院控訴院の建物が立つてゐる。その赤い煉瓦の壁も、恐ろしく夕陽に光る硝子窓も、あの雲を貫くやうな高いスレートの棟も、人氣のない廢屋のやうに日光から見棄てられ、いま、この冬の夜の壓搾するやうな、音響のない戦鬪の中に、いちめられて沈黙つてゐるやうに思はれた。

海軍省の宏壯な建物も、同じやうに沈黙つて動かなかつた。けれども、その隣りの海軍大臣官邸の門内には、數多の馬車が群れ集まつて、人聲が騒がしく大きな

窓から温かい光りが漏れてゐた。

外套に深く顔を埋めた、一人の青年は、闇の中を慌だしく歩いて、官邸の門に近づいた。然し彼れがたゞ一人、寂しさうに此處に辿りついたことを誰も知る者はなかつた。

玄關の石の階段は滑かであつた。銀色の金屬の把手のついた、見上げるやうに大きな硝子窓は、重く閉ざれてゐた。把手に手を掛けて内へ押すと、その大きな戸は、靜かに内へ開いた。

高い天井から吊り下ろされた花のやうな電燈は床の上に敷き詰めた紅と紫とを織り交せた絨氈を照らしてゐた。兩側には幾つかの美しい部屋が並んで部屋やの扉は何れも堅く閉ざれてゐる。電燈の光りは眩まばゆく青年の二つの眼を射た。新らしい絨氈の香と色彩とで、咽むせるやうな氣がした。遠くの客間では時々人の話聲が聞えるけれども、四邊は静かだ、人の姿が見えなかつた。傍の帽子掛には、數多の絹帽や軍帽や厚い毛皮の外套が掛けてあつた。青年は見知らぬ新らしい

い場所へ來たやうに、驚愕と恐怖の眼をみはつた。その時、左手の廣い階段を人の降りて來る足音が聞えた。それは二人の少女であつた。その一人は薄緑の洋服を着て柔かな肩から豊かに膨らんだ胸へかけて、細い金の鎖をかけてゐる。他の一人は藤色の華やかな着物ものを着て、毛髪を白い大輪の花で飾つてゐた。彼等の微笑を湛へた眼は、夢と小さな悪魔のやうに燃えてゐた。

青年は恐る々々少女に近寄つて斯う云つた。



『私は職業の爲めに此處へ来たものです。今宵の夜會を見る爲めに此處へ来たのです。』

少女は、これに答へた。

『食堂は、もう開かれてゐます。大勢の外國の賓客と貴郎が會はうとする軍人連とは、いま三鞭の盃を擧げてゐます。』

『でも私は私の職業の爲めに、その軍人連に會はなければなりません。』

『夜會の果てた後でなければ、貴郎は、軍人連に會ふこ

とは出来ませぬ。これから大臣と高官とは、外國の賓客と共に饗樂の宴を張らうとしてゐるのです。』

他の少女は斯う云つた。

『廊下に出て御覽なさい。廣庭には、宴席の賑ひを添へるための軍樂隊は居並んでゐます。やがて奏樂は始まるでせう。』

二人の少女は、青年を案内するために、先きに歩んだ。この二人は、この國の貴族の娘であつた。

黒く塗つたテーブルや、白い布で蔽ふた椅子や、搖椅子や、刺繍したクッションの載つてゐる安樂椅子などの雜然と並べられた應接室——電燈は輝いて、マントルピースの上の花瓶や菓子皿を照らしてゐるけれども室内は寂然として、人の姿が見えない——を通過して、まだ幾つかの薄暗い部屋を通り抜けて、二人の少女は細長い硝子戸の前まで案内した。

青年は廊下に出た。

廊下は、廣い庭に沿ふて、長く走つてゐた。その端づ

れに沿ふた部屋が、今宵の宴席に當てられた食堂で、室内の明るい光りが窓から外へ漏れてゐた。

濃い紺色に染められた空には、無数の星が『無智と無限』の暗示のやうに閃いてゐる。大都會の中央に近い大臣官邸の夜は、静かであつた。十一月初めの冷たい風は、華やかな温かい室内の空氣を知らず顔に吹き、洋館の屋根は、黒く濕つてゐる。巾の廣い堅い石の廊下には、物の影も見えず、青年の踏み鳴らす靴の音のみが寂しく響いてゐる。廣い庭の柔らかない芝生の上、人の

背丈にも足らぬ程の低い松の木の間には、軍樂師の一隊が居並んでゐる。十五の蠟燭は、蒼白く、松の青葉に燃えて、派手な樂師の洋服や、金釦や、樂符の白い紙や、眞鍮の喇叭などを照らしてゐる。樂師は、いづれも石像のやうに黙して語らなかつた。芝生の彼方、廣庭の盡くる所には、小さな森が見えて、その傍らには、この庭を圍繞らす小河が、チヨロ／＼と微かな夜の響きを立てゝゐる。

青年は、たい獨り、廊下の圓い柱に倚れて、躊躇したや

うなおど／＼した眼を、廣庭の方に注いでゐた。眼を閉ぢると、騒がしい都會の雜踏と、青年の苦しい闘ひといふことが、激しく彼れの胸を往來した。

『千九百〇九年、帝都の初冬！凡ゆる幸福と、歡樂と、生存の苦痛と、希望とは、皆夢のやうに過ぎ行く。』

俄かに奏樂の響が、丸い輪のやうに、芝生の上に漲り起つた。軽い踊るやうな進行曲は、蒼白い蠟燭の燃ゆ

る光を驚かして、流れるやうに響き初めた。

青年は静かに歩んで、食堂の硝子窓に近づいた。さうして、怖るゝ密つと窓掛の透間から覗いた。眩るしい、強い色彩に咽るやうな視神経を痺れさすやうな明るい電燈と花瓦斯の光に、酔つてゐる室内の空気が！天井は、蔦と杉の青葉と、彩色つた國旗とで美しく飾られてゐた。幾列にも並んだ白いテーブルの兩側には肥大つた大臣を中央にして、燕尾服や夜會服を着た外國の賓客や、金モールの軍人や、貴族や、その夫人や娘な

どが、居流れてゐる。

男は皆元氣よく喰べ、愉快げに語つてゐる。女はいづれも微醺を帯びて、やがて彼等の己み難い慾望を満たす可き舞踏會の開かれるのを、楽しんでゐるやうに思はれた。その華やかな女の群れには、先程のあの二人の少女も交つてゐた。

硝子窓の中は、種々の樹の梢に花の咲く、春の空気のやうに温かであつた。物の響は、少しも聞えない。外から見えるのは、たゞ動く金モール、懐へる白絹の服、花

東の紅と緑、白い齒、赤い唇、金髪。たい動く華やかな形と、色彩ばかり！

青年はこの光景を見てゐる中に、酔つたやうになつて、廊下の階段を下りた。彼れは、奏樂の響を聞きながら、柔かいゴムのやうな芝生を歩んだ。小さな森の木葉は、時々音を立てゝゐた。冷めたい戸外の空氣は動いてゐた。

この時、澄み切つた蒼空を急ぐ、二片の薄黒い雲のように陰氣な頼りのない、恐ろしい思想が不圖、青年の心

を過ぎた。彼れは眼を閉ぢて、深い吐息をついた。

今宵、彼れは職業のために、夜會の果つるまで、寒い戸外で、待たなければならなかつた。外國の賓客とこの國の貴族と、先程會つた、あの二人の美しい少女の、歡樂の宴の果つるまで、彼れはたゞボンヤリと、夜の更けるのを待つてゐなければならなつた。

不圖、斯ういふことが思はれた。

この國の貴族の娘が通つてゐる、ある學校では、毎年

卒業の儀式が果て、後——それは恰度永い陰気な冬  
が終つて暖かな春の始めに行はれる——屋根の尖つ  
た洋館の校舎の二階では、夜更くるまで、ピアノの響き  
が賑やかに聞えて、窓から漏れる火影と共に、處女の華  
やかな笑ひ聲が暖かな春の潮のやうに流れ出づる。  
夜が更けると、何時の間にか、明るい窓の燈火は、墓場の  
蠟燭の火のやうに、一つ々々心細く消えてゆく。する  
と、奥深い校舎の一室から、細い絶え入るやうな歎歎の  
聲が聞える。それは、相擁した處女の一団が、友情の最

後と、歡樂の死を弔ふ、憐れな叫び聲である……。

『この話は、處女の秘密を獵つてゐる男の、好奇心の餌  
にしたくない……何處までも眞實な涙を誘ふやうな  
然し心臓を貫かれるやうな、嫌な身慄の出る怖ろしい

話だ！——青年は、空想に耽りながら、斯う思つた。  
彼れの心の底——薄明りのほのめく心の底を先程  
よりも暗い雲の断片が、もつれながら忙しく往來した

また、切りに斯ういふことが思はれる。

終日の激げしい労働に、疲れて睡眠を催ほすやうな

倦怠した心の上へ、ある女の少し鳶色が、つた質朴な  
然し生々した眸が、凝つと望んでゐる。その情深い瞳  
は、倦怠した心を慰めてゐるやうに思はれる。ハツと  
何物にか驚いた瞬間に、その瞳は、うち勝ち難い力を以  
て、弛るんだ心を征服しやうとする。

それは『小さい家婦の情深い瞳』であつた。その柔順  
しい光の中には、愛と信仰とが燃えてゐる。

眼の醒めるやうな奏樂の響とともに、青年の心は、怪

しい光りを漲らした。

松の木の間、蒼白い蠟燭は燃えてゐる。食堂の燈

火が薄暗くなつた。舞踏會は、まだ始まらぬのであら

うか。瓦斯の光りと、舞踏の塗靴、小さい小さい女の塗

靴！敷石の上を軋る馬車の轍の音がギリ／＼……ギ

リ／＼……。

海の彼方の夜

私が漸く月島の渡船場まで辿りついた時に夜の闇は深く四邊の空気を閉ざしてゐた。大河の水は黒かつた。雨を一杯に孕んだ濃い煙のやうな雲が脚速に通り過ぎたので頭の上が急に少し明るくなつたやうな気がして、物に慄えた人のやうに天を仰ぐと涙のやうな大きな雨滴がポトリポトリと顔に落ちて來た。

帆布のやうなもので雨を防ぐ爲めに、屋根と圍ひとを作つた渡し船は、一瞬時の絶間もなく河の水がヒタヒタと岸を洗つてゐる水際の古い石崖の下に繋がれてゐた。また岸に近いある家の軒の下には、先程の激しい雨にも憶せず、四五人の車夫が盛に火をおこして暖をとりながら客を呼んでゐた。渡し船の中には多くの労働者が狭い腰掛にギッシリ詰つて河風に慄へながら口々に穢たなく罵つてゐた。労働者の外には二人の女と洋服を着た男と風采を判ずることの出



來ぬ四五人の男とが乗つてゐた。労働者はいづれも河向ひの新開の町に住んで、毎日二度必らずこの河を渡る人々である。年老つた船頭は顔一面に鬚の生へたやうな毛むくじやらの眼の恐ろしく光る男で、鎧のやうな蓑を着てゐた。その横顔は時々船内を振り向く度に、靡ろげなランプの光りに照らされた。船は靜かに岸を離れ、やがて小蒸汽船に曳かれて、浪のうねりの上を走り出した。兩岸の家々に點燈されてゐる、無数の電燈や瓦斯の光りは、黒い水の上にもその

影を落して慄へてゐる。小蒸汽船は青と赤とのランプを點し、小さな汽鐘は忙しく響いて、單調な働きに耐へ切れぬやうに、焦急しく微動してゐる。河口の方はポツとした白い霧に包まれてゐた。黒い不可思議なもの、巨像のやうに蟠つてゐる砂利採りの機械船は、黙つて河の中央に聳えてゐる。幾艘となく並んだ帆船の帆柱には、うるんだ眼のやうな航海ランプを點して、船の色も『寶榮丸』『三洲丸』など、船腹に書いた黒文字も、水夫の薄襪なく汚れた青い洋服も見えぬけれど

も、たゞ時々危険を報せるやうな叫び聲が、黒い船體の甲板から水の上を響いて来る。その叫び聲が聞える毎に私の心臓は小踊りした。雨に濡れた帆布の透き間からは、絶えず潮を含んだ河風を吹きつける。房州通ひの小さな汽船は、ドン々々と水面を桶の底でも叩くやうな汽鐘の音を立てながら海を目指して出て行く。黒い水の上の凡てのものは、閉ざされた雨の夜の深い沈黙の中で動いてゐた。潮を含んだ河風は、痛々しい程強く私の皮膚を撃つた。さうして私は波浪と風

とに惱んだ航海者が新らしい陸地を發見した時のやうに、新らしい官能と意識の眼を開いて、吹きつける潮風を思ふさま胸一杯に吸つた。

水蒸氣を含んだ上流の市街の空は、幾萬の燈火に紅く焼けて、時々雨雲が黒い龍のやうに奔りながら其影を映してゐた。

渡船が向ふ岸に着いた時に私は急に激しい饑と寒さを感じた。實際私の着物は労働者のよりも薄かつた。私は日が暮れるまで——終日——ある恐ろし

い然し影のやうな幻のやうな敵と闘つてゐた。その  
恐ろしい敵の姿が密つと影を隠し、私の心が疲れ切つ  
た時に、私の身體は羞耻を感ずる人のやうに饑と寒さ  
との激しい缺乏に耐へずして慄へてゐるのを知つた  
それで私は漸く疲れた身體を引ずつて、月島の渡船場  
まで來たのである。この新らしい陸地の海に面した  
小さな家には、友なる藝術家夫妻が住んでゐる。  
新開町の夜は、寂しかつた。雨に濡れた軒燈は、泥濘  
の途を照らし、大概の家は、まだ暮れたばかりなのに戸

を閉ざしてゐた。それでもこの新開町に應はしい果  
實店には、まだ色の青い蜜柑や、光澤のある林檎が美  
しく並べられ、肴屋の青い苔の生へたやうな臺の上に  
は、真紅な血のやうな鮪の切身と光つた錫のやうな色  
した青串魚が、油煙を立てた瓦斯の裸火に照らされて  
ゐた。狭い横町の角には、油障子で圍つた天麩羅屋と  
西洋料理の屋臺とが、雨の街を色彩したや一つの哀れ  
な賑はひを添へてゐる。渡し船を上つた労働者は、食  
慾の激しい缺乏を感しながら、然し人前は如何にも春

氣なやうな顔をして、これ等の飲食店の前を通り過ぎた。

だ、広い本通りの街には風が吹いてゐた。私はこの街を通る毎に見慣れぬ異國に來たやうな感じがする。道巾が殆んど數十間もある大通りの兩側には、蓬々と雑草が生へてゐる。道巾の広い故か、兩側に建てられた家々の屋並は、マッチ箱を並べたやうに低く見えて、たゞ電柱のみが思ひ切つて高く、矗々と空に聳えてゐる。空の雲は、人の生命を左右する危険の報知の

やうに、怪しく動いて、大通りには人影が見えなかつた。高い橋の袂の交番の紅燈は、闇黒の海の底へ導く道知るべのやうに、たゞ一つ寂しげに瞬たいてゐた。雨を舍んだ風は、路傍の雑草を吹いて、款款きながら、何處へともなく過ぎて行く。

晝間なれば、鉛色をした海が、道よりも高く見えて、時々白帆が、陰府へ行く使命の翼のやうに動き、兩側の鐵工場で耳を聳にするやうな鐵板を打ち叩く響きが、ガンと早鐘のやうに聞えるのであるが、雨の降る夜

はそれ等の何物をも見ることも聞くことも出来ぬ。  
小さい獣の鳴くやうな怪しい汽笛を鳴らして走り過  
ぐる水上警察署の遠羅船さへ忍び行くやうに黙つて  
暗黒の海を迂つてゐる。

たゞこの沈黙と水蒸気を含んだ夜の空気のなかで私  
の眼をひいたものは道の左側の小河の傍に、三角形に  
鋭く尖つた硝子張りの屋根が強いアークライトのや  
うに輝いてゐる、ある工場の煉瓦造りの幾棟かの建物

であつた。

泥濘は深かつた。私は、餓と寒さと新らしきものを  
迎へる恐怖とに慄へながら、幾度かつまづき倒れんと  
した。

大通りの盡きんとする處、海邊に近く友なる夫妻は  
住んでゐる。私は常にこの年若い夫妻を『貴重なる友  
達』と呼んでゐる。私が斯く叫ぶのは、この二人が新ら  
しい藝術に親しみ、新らしい藝術家を解してゐたから  
ではない——何故なれば、この二人は永い年月の間謙

遜で質朴な田舎人の戀を味つて、凡ゆる羈絆を斥けて  
温かい生活を營んでゐるからであつた。ある日、友は  
まだ生れたばかりの男の兒を膝の上に戴せて『この兒  
の聲は詩である』と言つた。傍にゐたその妻はこれを  
聞いて『いえ、音楽でせう』と云つた。私はこの二人の會  
話に尠しも虚飾と誇張とを認めることが出来なかつ  
た。

友の家は近づいた。私の身體はもう疲れ切つてゐ  
た。潮を含んだ風は、この新らしい陸地の家にも吹い

てゐた。友の家の窓からは、温かい火影が漏れてゐる  
私は友の骨張つた顔や、細君の眼鏡をかけた顔や、護謨  
人形のやうな男の兒を思つた。

海の彼方の夜は暗かつた。私は不圖、その海の向ふ  
には露西亞の大陸があるやうな氣がした。そうして  
其處には、終日『死』といふものと睨み合ひをして暮して  
ゐる露西亞人が住んでゐるやうな氣がして、何事かを  
聲をあげて叫びたくなつた。それは私にとつて、唐突  
の聯想ではなかつた。

北國に歸る少女

夕陽は公園の緑葉の茂みを赤く染めた。冬の日の終  
焉を奏づる薄ら寒い風は公園を繞らす白い石垣と緑  
色の鐵柵とに物悲しく吹きつけ、人影の見えぬ奏樂堂  
の屋根には、この邊りに珍らしい鳥が二羽鳴いてゐた  
噴水塔の邊りにある腰掛や運動場に近い小山の上  
に、今まで憇ひながら寂びれて行く公園を眺めてゐた

人々も何時の間にか、一人去り、二人去り……或る者は  
花壇を彩る花の無いのをつぶやきながら、或る者は公  
園の中央にある西流料理店の露臺に、顔色の蒼白い銀  
杏返しの給仕女が柱に倚れて、凝つと地上にもつれ合  
ふ木の葉の灰色の影を見入てゐるのを、不思議さうに  
見上げながら、何處へか消えるやうに散り々々にその  
姿が見えなくなつてしまつた。これ等の人々は、寂び  
れ行く冬の公園に止まつて、夕陽が森の底に沈むのを  
見てゐるに耐へなかつたのである。

秋の末ならば、黄ろい枯葉がカサ／＼と面白く――  
されど悲しく、せめてこの邊を逍遙する人の心を慰め  
たであらう。然し、冬のこの頃、冬の公園の灰色の車道は  
塵一葉も留めず、時々護謨輪の二人曳の俾が、音も立て  
ずに見向きもせず、足早やに通り返るのみであつ  
た。

その車道を白い花崗石の正門の方へ、一人の少女が  
静かに歩みを運ばしてゐた。

夕陽を受けた電車の軌道は、黄金の光のやうに輝い  
て、カーヴを軌る車輪の音が、絶望者の鼓膜を突き破る  
やうに激しく高く鳴つてゐた。街には、冬の日の一刻  
を争ふ熱鬧の鬨ひが始まつてゐた。無数の人々は、神  
經過敏に休みなく動いてゐた。電車の十字路には、黒  
い外套を着た信號手が、赤い小旗を持つて疲れ切つて  
立つてゐた。彼れの忙がしい心は、終日、幾百臺の車と  
幾萬人の人間とを見送つたであらう……。漸くその  
足場を脱いだ帝國劇場の白い建物と、赤黒い煉瓦造り



の警視廳とは、此の忙がしい街の片側に聳え立つて、道行く人の心に思ひくゝの聯想と豫期とを起させた。白く塗つた棟の丸い高く聳ゆる、まだ一度も賑やかな音楽の響かぬ劇場の建物は、電車のベルの響きと無数の人々の喧騒とにおびえながら立つてゐる少女の心に去り難い懐しきと寂しさを起させた。何故なれば、彼の女は、その華やかな生涯の中に、もう再びこの建物を見ることが出来ないからである。彼の女の心の中には、その時無意識に、毎日この劇場の前を通つて

『都會の女學校』に通ふ、その友達の事を思つた。その友達は『婚姻』といふ青春の美しい血と、赤黒い穢い血とが不思議に掻き亂される、秘密な酒のやうな夜が、數ヶ月の後に來るのを待つてゐた。

少女は、公園の前から、電車通りを歩んだ。數寄屋橋の上立つて、振り返へつて眺めると、夕陽は、何時の間にか陰つて、薄青い西の空の海に漂ふ、一條の白雲は、薔薇色に染められてゐる。短かい冬の日、静かに暮れ

るのである。電車は幾臺となく橋の上を往來してゐる。橋の下の濠は濃い腐つたインキのやうな暗緑色の水を湛へて、水の表面は時々吹き來る寒い風に細かい規則正しい小波をあげてゐる。砂利を溢れる程積んだ船は上流の方から靜かに土橋の方に向つて動いてゐる。岸に繫いだ荷足船の上では穢い着物を着た頭髪の亂れた女が、其の日の夕食に當つべき白い大根を洗つてゐる。

有樂座の灰色の屋根には、微かな夕靄が降りて、その

建物を包まうとしてゐる。イルミテーションはまだ點かぬ。白地に黒く『子供日』と書いた立看板は、まだ外づされずに、人の眼を引いた。この建物を隔て、遠い西の空には、帝國劇場や、警視廳や、馬場先門の商館の建物が漸くその色彩を失つて、薄い鼠色に聳えてゐる。

少女は歸る可き故郷の北の國を思つた。難の深い平原の丘の上に建てられた、新らしい家には、憂鬱の涙を湛へた兩つの星のやうな眼を持つてゐる少女の姉

が彼の女の歸りを待つてゐる。「都會の女學校」は彼の女にさまざまの悲しいことを教へた。さうして彼の女は、この都會をもう再び見ることが出来ないのである。

氷の裂ける音を聞きながら語り明かす長い冬の夜の團欒、林檎畑、橋の遊び、森林の梟の聲——これ等は彼の女の幼な馴染であつた。彼の女は、これ等の幼な馴染と暮すために、都會を棄て、歸らねばならぬのである。丘の家には、朝も晩も、姉とその男の兒とが「悲しき

遠征』を歌つてゐるであらう。吹雪が森と平原と家の黒い板圍とに吹きつける二月の五日には、姉が怖ろしい悪魔に魅られたやうに、神棚に燈明をつけ、蒼白い顔に化粧して『坊やお父様の歸つて来る日に泣いてゐるであらう。すると、板圍の外の道路には、軍隊の長い行列が重い足跡を響かして、通り過ぎるであらう。若い姉とその男の兒は、幾年か前の二月の五日に家出した儘、歸つて來ぬ『屯田兵の夫』を、まだ同じやうな心で待つてゐるであらうか……。

都會の夕暮が、少女の追憶に涙を誘ふ頃街には瓦斯  
が點いた。有樂座はイルミネーションに輝き、少女は  
何時の間にか、悲愁の夕靄の中へ消へ去つた。  
濠の水は、兩岸の燈火に慄へながら紅く燃えてゐた

## 墓 場

水色の薄絹を張つたやうな、哀れな、哀れな、高い空を永  
い間凝つと仰いでゐた。いつの間にか、私の瞳に、耐  
へられぬやうな、貴い涙が浮んでゐた。さうして『墓場  
はたのし……われ等は、生くるがゆへに……墓場の花  
は美はし……われ等のかくれ家』といふ歌聲が街の動  
搖と色彩との中に私の呼吸から流れいつる。

街は、墓石を朝から晩まで彫つてゐる石工や、墓石を  
彩るべき花を賣る店で満されてゐる。佛殿のやうに  
棟の反つた二つの齋場は、大きな黒い扉が堅く閉され  
て、その前の廣庭には、一株の桃の大木があつて、古い錦  
繪に見るやうな色の赤い花が咲き亂れてゐる。また  
會葬者や、參詣者の來るのを待つてゐる。大きな木の  
看板を掲げた家の中には毛布を掛けた床几や、白い布  
で蔽ふた古ぼけた椅子卓子などが見える。棚の上に  
は、阿伽桶と、櫛の枝と、線香の赤い包紙を束にしたのと

が、雑然と並べられてあつて、上り口の大きな眞鍮の火  
鉢の傍には、派手なメリンスの襷をかけた顔にソバカ  
スのある女が、眠むさうな顔をして、ボンヤリ前の通り  
を眺めてゐる。

街には、薄暗い春の日光が漂つてゐた——墓場に近  
い街を照らす春の日光は、人の視神経にも心の底にも  
ゆらくと薄暗い影を印して漂ふてゐるのである。  
多勢の人々が、樂しさうに、墓場をさして、急いであるい  
てゐる。勿論、墓場に行く人ばかりではあるまい。黒

塗りの四角な箱に、前世紀からこの國の下層社會の間に用ひられてゐる古い不思議な藥をつめて、黄ろい聲で唄をうたつて歩く藥賣が通る。その四角な二つの箱からは、絶えずカタカタ……カタカタ……と奇妙な神秘的な音を發する。豆腐屋や豆賣が慌だしい喇叭や鈴を鳴らして通る。赤い彈藥の箱を擔いだ歩兵の一隊が、重い靴をゴトゴト響かせながら、鼻唄をうたつて通る……。

『何時の間にか、また此處へ來てしまつた。』かう私の心が慨くやうに、つぶやいた。私の心は永い間、何ものかを渴望してゐたのである。その渴望してゐるものが何であるかを、自分で知らぬことに氣がついた時に、私は悪夢のやうな家の中から逃げ出して、香の高い春の空氣の中に、道ひ出ると、眼には止め度なく、感激の涙が溢れた。

美しく着飾つた女が、男の血管に透きとほるやうな聲で囁きながら、私の傍を通るのに、不圖氣がつくと、私

は何時の間にか、この墓場に近い街を歩いてゐるのである。

花屋の門口に立つて、密つと戸内を覗くと、冷めたい穴藏のやうな家の中に、二列になつた棚の上には、数多の小さな桶が並んでゐる。その桶の一つ／＼にさしてある緑の枝には、さまざまの花——黄ろい菜の花、桃の花、彼岸櫻、乳色をした木蓮の花などが、暗い空気の途中で、一齊に咲き揃つてゐる。棚の前には、紺の仕事着を着た年の若い花屋の主人が、桶の中の花を振り分けて

ゐる。さうして彼が手に持つてゐる花鉢の音が、時々パチ／＼と、闇の中に閃く火花のやうに、家の外に響いた。若い主人は心の中に、破れ障子を隔てた奥の四疊半で、布團にくるまつて苦んでゐる、孕んだ若い女房のことを氣遣つてゐた。赤ン坊は遅くとも今夜か明日の朝は生れるのである。主人が、その頃前の茶屋の女中をしてゐた今の女房に戀して、叔父や叔母を散々困らした揚句、漸く希望が叶つて、結婚したのは、一昨年はるの春であつた。

その時恰度前の通りを流れてゐる空氣の色が、バツと急に明るくなつた。大空の中央に動いてゐる太陽が、その飴色の薄い蔽ひを脱いだのである。花屋の暗い家の中にも、明るい光がさし込んだので、緑葉の色が銀のやうに輝いて無数の桃の蕾は、一時にその美しさを映り返へした。

花崗石や人造石などの石材で埋められた石屋の仕事場には、二人の小僧が熨斗のやうな重い鐵のヤスリを動かして、高價の墓石を磨いてゐた。その傍には石

粉で頭髪や仕事着を眞白に染めた職人が、カン／＼と脳骨を打ち碎くやうな槌の音を響かせてゐる。重い金槌が下ろされる毎に石粉は四邊へ散亂した。

葬式の歸りらしい人夫の一群が、空になつた駕籠を昇いで街を通つた。人夫はいづれも老人ばかりで、皆同じやうな盲縞の袖の長い着物を着、同じ色の股引をはいてゐる。黒く塗つた駕籠の漆の色、迸るやうな光に輝いてゐる金色の鋌が、長閑かな温かい空氣の中で、す／＼と流れるやうに動いて、その駕籠の小さな



扉の間から先程まで新らしい棺を蔽ふてゐた水色の衣が見える。

ハハ……と人夫が、一時に、閃の聲を擧げるやうに笑つたので、花屋の主人は鉄を持つた儘愕いて、通りを眺めた。花屋の主人に見送られた、空駕籠と人夫の行列は、石屋の仕事場を覗き込んで通つた。

街の出端づれまで来ると私の前には、墓場をとり圍む、白い石垣が長くつゞいてゐる。石垣の内は無限の

静寂に満ち々々て、派手な華やかな、薄紅の櫻が嘲笑ふやうに咲いてゐる。永い間鉛の錘のやうに鈍く鬱ぎ切つた心の底から耐へ難い悦びが泉のやうに迸り出て『墓場はたのし……われ等は生くるがゆへに……墓場の花は美はし……隠すに耐へぬ罪惡よりも……』といふ微かな、ある光明の來るのを豫言するやうな歌聲が、何處からともなく響いて來る。

樺色の墓場の土は、静かに歩む足の下に柔かく、濕めやかな若草の香を漲らしてゐる。幾百……幾千……

幾萬となく、さまざまの墓碑は、規則正しく並んで、細い小徑は、縦横に走つてゐる。私は暫らく爽かな心地に返つて、無心に歩む。

小高い丘の上には、傷ついて死んだ大勢の軍人の墓がある。青銅で造つた劔のやうに尖つた記念碑が、高く聳えてゐる。新らしい白木の墓は、桃の花と菜の花の紅と黄で、美しく飾られてゐる。またある墓碑は、白い石垣で圍繞し、緑や茶色の鐵柵で、嚴めしく封せられてゐる。飴色の日の光は、それ等の墓場を照らした

さうして、その四邊に浮動し、遊曳する色彩は、如何に悲しく、私の悦び疲かれた眼と心とに侵み渡つたであらう！

白く胡粉を塗つたやうな、花岗石の墓碑の表面には、それを蔽ふばかりに茂つた樅の葉が、深い傷に痛んでゐる。生ける靈魂を慰めるやうに揺れてゐる。また紺色の大理石のつる／＼光る滑かな墓碑には、金と赤で梵字と人の名とが彫りつけてある。陽炎はその滑らかな石の表面をとりまいて、ゆらくと燃えてゐる。

小さな靴の足音が遠くから響いて私の方へ近づいて来た。それは若い天主教の僧尼であつた。四角に張つた白い頭巾のやうなものを冠つて、真黒な着物を着てゐるその姿が、墓石の影に隠れてしまふと私は、煤けたやうな古い記憶の中から、その僧尼の赤い顔といつても夢を見てゐるやうな眠むさうな青みが、つた、瞳とを憶ひ起こした。私が彼の女を見たのは、一年前。若くは二年前、都會の雑踏の中を走る電車の中であ

つた。兩側の街には、瓦斯の光が數多の流星のやうに漂ふて、冷たい霰がピシヨ〜と降つてゐた。私はその時、霰の降るのが無上にうれしかつたのである。PI  
PIV . . . BITTERNES . . . MISERABLE . . . 霰 . . . こん  
なことを考へてゐる中に、不圖私の前に腰をかけてゐる、天主教の僧尼に眼を止めた。私は感激と恐怖の情を以て、彼の女を見まもつた。その時彼の女の瞳の中には『獸性』の血が燃えてゐた。そうして彼の女は、白い頭巾を冠り、黒い着物を着てゐた。

墓地の西南の隅谷を隔て、向側の高臺を見下ろす所には、十字架と大理石と、洋字の聖句と、蔦の葉と花輪とを以て満された基督教徒の墓場があつた。僧尼は朱塗の門を開けて、美しく滑かな小石を敷きつめた、その墓場に入つて行つた。

私が彼の女を見てから、何年の歲月が経過したであらう。兎に角、その間に私は、一人の老いたる母と、二人の愛す可き女の魂とを殺した。私は鋭い七首を以て彼等を刺したのである。

さうして現在、私は斯うして、墓場を逍遙ふてゐる時にのみ、長閑な、楽しい春の自然の歌を四邊に聞き、激しい心の動搖を押し静めてゐる。

第  
三  
篇

## 未明の蟋蟀

われを愛せし人の朽ちゆく肉  
體のためにこの一篇をさへぐ

慈母にもまさる情をもて、つれにわれを愛したま  
へる土肥朝子様は、六月十日夜、突然、掻き消すごと  
くに身逝りたまへり。わが五官は、それが夢にあら  
ざるかを深く疑ひぬ。われは今、おん身の肉體の  
何處に行くを知らず。一夜睡みもせずして、おん

身の死顔を見まもりしわが心は、未明の蟋蟀のこ  
とく悲しかりき。

磨硝子の窓から鉛色の未明の光が忍び込む。闇を閉ざした雨空から……微かに……微かに……涙のやうな薄ら明りが忍び込む。

通夜の人々はみな退いた。おん身の愛児すら不意の愕きと悲しさに泣き疲かれて隣の部屋に眠つてゐる。一晚中涙に濡れた顔を照らした電燈は消えんとして瞬いてゐる。夜が明けはなれるのだ。

何處からとなく不思議にも蟋蟀が青い羽を顫はして飛んで來た。さうして、おん身の死骸を蔽ふた白い衣の上をピョン／＼と飛んでゐる。するとおん身の死骸が、まだ微かに吐息をついてゐるやうに、薄ら明りの夜氣の中で、うち明けなかつた秘密事を語つてゐる。蟋蟀は、雨空の涙の露を吸ふて來た。その細い嘴から香水のやうに、おん身の死骸の上に雨空の露をふりまいてゐる。ピョン／＼と蟋蟀は飛ぶ。

吉凶の御圍の絲を引くやうに、夜は明け離れんとし  
てゐる。太陽が上つたならば、人々はおん身の死骸を  
葬るために、黒い布をもて蔽へる柩をつくり、おん身の  
死骸にホルマリンと、薄荷油と、強い香薬とをふりかけ  
白百合と鬼百合と、黄菊と、柘榴の花と、菖蒲花と、赤い赤  
いカーネーションと、また種々の小さい、しほらしい草  
花をもておん身を包み、さうして基督の犠牲にするや  
うに、歌をうたつて、黄ろい野の中の火葬場に、おん身を

運ばんとしてゐる。

おん身は、使徒のやうな傳道者の妻であつた。謎の  
やうではないか、日本橋の中央の老舗で名高い酒屋の  
娘、紺濃簾の中で生れたおん身は、二十年の間、邪宗の教  
への、十字架の御弟子であつた。  
人々がおん身の死骸に涙をそゝぎ、歌聲ほがらかに  
主を讃め稱へてゐる間に、私もともにおん身のために  
涙をながし、おん身の薄命を偲ばしめよ。



『酒は三久入り来る福は小網町……』三久は、おん身の家の家號であつた。幾棟も列んだ古い土藏の中で踊と、三味と、歌澤の稽古と、俳優の似顔に育てられたおん身の若かき日の富と誇とは、かの夏の日の酒倉の壁にかげらふその如くに、過ぎ去つた。さうして、おん身は謎のやうに、傳道者の妻となり、二十年の間貧しき人の可憐なるみどり兒のために、惜しげもなく愛の涙をそゝいでゐた。

おん身の老いたる姿を見るごとに、私は幾度か過ぎ

しおん身の若かりし日を思ひ忍んだが。おん身が死なんとする日の前に、色蒼ざめて『天なるわが家を仰ぎみれば……涙にかすめる……眼も晴れたり……』と歌つたときに、如何に私の運命を疑ふ心は戦き『美』を戀ひしたふ心の悲しみは、絃のごとく顫へたか。

夜は明けはなれた。闇と燈火が命を失つた。おん身の死骸を焼かんとする、陰鬱なる日は忍び寄つた。秘密の死骸を大地にかへす時は迫つた。蟋蟀は何處

へ飛び去つたか。

私はこれから慈母の涙に渴して、生きながらへて、いつまでも饑を叫んでゐるであらう。

### 曇降る日の哀傷

空を蔽ふた雲は、宿酔の不安な眼險のやうに、重く閉ざし、戸迷ひした人の心にさす、瞬間の微かな薄光明を、凍りついて沈黙した街路の上に投げてゐる。

街路の片側には、大きな病院の煉瓦塀が、單調についで、その煉瓦塀からは、もう葉の枯れ落ちた灰色のポブラの枝が規則正しい間を置いて、寂しげに覗いてゐる。

る。

煉瓦塀の内は、都會で有名な病院の建物であつた。電車は、日に幾度と數へられぬ程「都會の病人」をこの病院へ運んでゐる。

白く塗つた建物の中では、毎日々々さま／＼の病人が痛ましい叫聲ををげてゐるけれども、いつも赤い笑ひを耐へてゐるやうな煉瓦塀は、この苦悶の叫び聲を決して外へ漏らさなかつた。

病院に對ひ合つた街路の片側には、貧民の胃腑を満

たす食物を賣る店や、雜貨店や、車屋や、馬肉屋や、下等な宿屋などが並んでゐる。さうして、是れ等の家々と、殺風景な街路とは、曇つた雪空に、終日壓へつけられて黙つてゐた。

街路には風が吹かず、空氣は氷を孕んでゐた。附近の寺で打ち鳴らす鐘の響さへ、今日は聞えなかつた。平素は快濶で、思ふまゝに遊び歩く子供達も、その日は何となく不機嫌で、家の軒下に佇立んで「雨が降るか

雪が降るか、それとも嵐になるか……』と、情けない顔をして慄へてゐた。けれども、都會から喘ぎ々々この病院に集つて来る人々は絶えなかつた。

『青年の窓』は、この街路に向いてゐた。皮膚の下に流れてゐる血は、冬の鈍い日光の下に沈んでゐた。樂しい生は冬籠をしてゐるのである。その窓からは、いつも若い呼吸が流れてゐるのである。

終に、薄暗い空は、永い間の沈黙を破つた。サラ々々と物の觸れ合ふ音がして、街路と屋根に雲が降り始め

た。その瞬間に、何處からともなく、小さい心臓の血を破るやうな子供の泣聲が聞えた。

その瞬間に、いままで黙つてゐた凡ゆる物象は、臆病

な人が肩を揺がすやうに、慄へながら動いた。

鐘の音が、微かに二つ……響いた。やがて、街路の家々から、騒がしい人聲が聞えた。

『青年の窓』は、鶏の肉を賣る店に向いてゐた。鶏  
ピシヨ〜と降る雲は、地上に落ちると消えた。

の肉を賣る店では、年増の女が、白い上衣を着て、赤い鶏の肉を割いてゐた。女は庖刀の手を休めて、ぼんやり雲の降るのを凝視めながら、涙ぐんだ聲で『嫌なものが降り出した！』とつぶやいた。

店頭には、毛をむしつた、白い皮ばかりの瘦せた鳥が五六羽、脚を縛つて逆さに吊り下げてあつた。白木の大きな俎の上には、血の凍りついた鶏の胴殻や、卵色の脂肪が堆高く盛られてゐる。女は、寒さに縮んだ指先で、その肉を撰り分けてゐた。

店の片隅には、澤山の鶏卵が、山のやうに積まれてあつた。寒さうな板の間には、真鍮の火鉢に、赤い炭火がおこつてゐた。

青年は、ぼんやり雲の降るのを眺めてゐる中に、何物にも譬へ難い哀傷の音楽が、胸の底から湧き出るのを覺えた。

向側の鶏の肉を賣る店の軒下には、三羽の鶏が籠の中で餌をついばんでゐる。トサカの赤い牡鶏は、柔か

い毛を慄はしながら、時々頸を絞められるやうな苦し  
い聲を出してゐる。

冷たい情けない霰が降つてゐた。

青年の心は、不圖過ぎし霰降る祝宴の夜を睡むやう  
に憶ひ起した。

それは『新らしい冬』を迎へた悦びを分たんがために  
都會の人々が催ほした祝宴であつた。華やかな宴席  
には、囁るやうな花瓦斯の光が照らしてゐたけれども

戸外の夜は寒く、霰が泣くやうに降つてゐた。

青疊を敷き詰めた、廣い宴席に居流れた人々は、酒杯  
を手にして、長夜の歡樂に酔ふてゐた。華やかに装ふ  
た踊妓等は、祝宴の興を添へるために、人々の心を騒が  
すやうに賑やかな鳴物に合はして、踊り狂ふた。

踊妓等は、いづれも年若かく、生の樂みを誇つてゐた  
その一人は、

一人は、黒い髪に白い花束を簪してゐた。その一人は、夕日  
薄紫色の裾の長い踊衣を着てゐた。その一人は、夕日  
に照らされた紅葉のやうな派手な帯を締めてゐた。

その一人の頬の美はしい、希望に満ちた、若さを誇るやうな額には、愛と悦びと淫樂との酔ひが満ちてゐた。青年の心は、その最も華やかな一人の踊妓に引かれてゐた。さうして、彼れは、愛と悦びと淫樂とに酔ふてゐた。

けれども、青年は終に、踊妓等の中に最も踊衣の醜い顔色の蒼ざめた、一人の踊妓を見つけた。中で、自分の踊衣が誰れのよりも醜いことを耻ぢてゐた。彼の女の心は、常に他の踊妓のやうに冴えなかつた。

た。悲しみと耐へ難い耻づる心とは、彼の女を捕へてゐた。

青年の心は終に、この最後の踊妓に注がれたまゝ、離れなかつた。長夜の宴の果つるまで、冥はピシヨくと物悲しく降つてゐた。

病院の前の街路は、氷凍つてゐた。煉瓦塀は、黙つて悦樂の前に立つ障壁のやうに思はれた。鶏の肉を賣る店の軒下では、牝鶏が寒さうに鳴いてゐる。

『青年の窓は』かゝる寂しい街路に向つてゐた。  
青年は、われ知らず小聲に斯う囁いた。『あゝ、われ等の幸福！』……『霽降る日の、冷たい、冷たい哀傷！』  
彼れの瞳は涙ぐんでゐた。  
霽はまた降つてゐた。

### 月光と少年

鳥羽野に通ずる埃深い街道は、終日、懶惰なる日光に照らされて輝いてゐた。その街道の片側には、屋根瓦に緑色の苔が生へた、長い茶色の土塀がうね々とついで、塀の裾の濕つた土には、力なげにタンポ、の萎んだ花が垂頭れ瓦の裏にはところとくに灰色の蜘蛛が銀の巢を張つて、それが微風にフワリくと揺れてゐる



た。

土塚は、青葉の森を包んでゐる。杉や樺の森の梢を  
凌いで、千幾年といふ古い教義の秘密を藏してゐる五  
重の塔が、高い空に聳えてゐる。青葉の森には、つねに  
香りの高い柔かな風が訪づれて、この森を見る人の心  
には、いつも希望の涙が湧き出づる。けれども、セピア  
色の塔は、櫻の花が散つて、樹々の嫩葉が生ひ茂つて、地  
上が全然青葉で包まれてしまつたことを、少しも知ら  
ぬかのやうに、何かしら寂しさうに、或る偉大なるもの

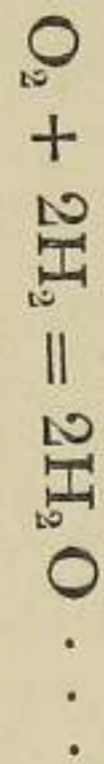
不幸な運命を嘆くやうに聳えてゐる。

この街道には、屋根の低いさまざまの商家——鉄の  
柄を賣る店や、鍛冶屋、足袋屋、飴屋などが軒を並べてゐ  
る。さうして街道の盡くる所には、褐色と緑色とを織  
り交せたやうな、廣々とした野が展開されてゐる。こ  
の埃深い道は、毎朝と夕と二度に、野の中の中學校へ  
通ふ中學生のジャケットの姿で充される。その時に  
始めてこの邊りの空氣は、何となく活氣づいて、塔や森  
の姿が、一際はずきりと空に畫かれるやうに思はれる

けれども中學生の群れの姿が森の中に消えると、上鳥羽から大坂街道の桂山崎まで歸つてゆく牛車の轍の音がゴロ／＼と間斷なく響いて、森の佛殿の階に跪いてゐる人の心は、古い世紀から傳はつてゐる、この寺の古い秘密に酔はされてしまふ。時としては、牛追の若やいだ唄聲が、麥畑から舞ひ上る雲雀の鳴くやうに高く聞えることもあるけれども、直ぐ轍の音に打ち消される。その轍の響に誘はれて、單調な色彩の上を匍ふて行く眼に見えぬ小さな虫のやうな心細さが、そ

の邊りの空気を充してしまふ。

この街道の夕暮れに間近い頃、



と囁く聲が、不圖道端に聞えた。それは恰度、足袋屋の店の前であつた。その店先には、淺黄色の手拭や紺色の腹掛や、同じ脚絆や、埃まみれになつたハンケチなどが、ぶら下げてあつて、大きな白ペンキ塗の足袋の形をした看板には、黄ろい日光がさしてゐる。足袋屋と飴

屋——この二軒の店は、數十年以前から、毎日規則正しく同じ時間に、森の中に通ふ信心深い人の心に、忘れ難い印象を止めてゐる。

古風な足袋屋の店の前には、眼のうるんだ少年が、先程まで單調な暗誦に苦んでゐた化學の附號を口の中、で繰り返へしながら、白い道を塔の方へ歩んでゐた。彼は、この古い都の街端づれに育つたのである。彼は酒癖のある父を持つてゐたので、彼の頭はその遺傳のため、害はれてゐた。さうして彼の幼い心は、塔と森

と、朱塗の佛殿と、森の中の幽鬱な池と、牛車の轍の響と、に養はれたのである。

太陽は、鈍い拋物線形を空に描くことを止めて、漸く西方の空に落ちかゝつてゐる。遠くの野の中から、黄ろい光が湧いて出るやうに思はれて、白い道の色は、刻々に變つて來た。家々の屋根は、黄金色の輪廓で包まれてゐた。森の梢と、塔の屋根との間を飛び渡つて遊んでゐた五位鷺は、塔の頂上の風鈴まで飛び行かんとする大膽な野心を放棄して、鳥羽野に落つる夕日を凝

つと眺めてゐた。

少年は、眩しい夕日に顔を晒らして歩んだ。彼が歩み行く後には、道の上にその細長い影が彼の足どりと同じやうに動いてゐた。

O<sub>2</sub> + 2H<sub>2</sub> . . .

とつぶやきかけて、彼は口を綴んだ。

凡ゆる疑問が彼の脳の中を飛び廻つてゐるやうな気がした。不圖彼は、塔を遠く望んで、先頃、その塔の影で死んだ親しい友のことを憶ひ出した。友は、痩せて丈の高い、サブラノの聲を持つてゐる少年であつた。「李

花淡白柳は新清柳絮飛ぶ時、花城に満つ』といふ支那の詩をうたひ、明笛を吹くことが好きであつた。友は舊都の中學校に入るために、遠い中國からひとり旅に出たのであるが、不思議にも彼は、この塔の影に在る小さな鍛冶屋の娘に、彼が道端に倒れてゐるのを助けられた。終にはその家の薄暗い二階に住ひながら、森を抜けて野の中の中學校に通ふことゝなつたのである。この少年の姿は、その多くの友にさまざまの空想を抱かせた。ある者は彼の生命は、塔の黒い影の犠牲になつた

のではないかといふ激しい疑問に苦められてゐた。  
恰度その時街端づれに近かい塔の影の鍛冶屋の店  
頭では、暗い店の隅に、真赤な切炭がカン／＼おこつて  
片手にはヤットコを持つて、焼け爛れた鉄を掴み、片手  
にはフイゴの柄を動かしてゐる、年老つた髪の白い鍛  
冶屋の主人の顔が、鬼のやうに赤く輝いてゐた。この  
鍛冶屋は、まだこの老人が生れぬ先から塔の影に在つ  
た。幾代前の祖先が、この陰気な街道に、火を弄ぶ商買  
を始めたかは、この老人を始め、一家の誰れもが知らな

かつた。街道を道る中學生の群れは、この老人を「黙つ  
てゐる鬼」と云つて、揶揄つた。

夕日は、鍛冶屋の家の黒い屋根をなめてゐた。その  
薄暗い屋根裏の四畳半には、第二の少年が試験の問題  
を手にする一瞬時の恐怖を胸に書きながら、英語の  
一デインダに餘念がない。この第二の少年は、其姉が  
犯した羞耻に耐へられぬ罪惡をつねに慨いてゐた。  
さうして、自分は、鍛冶屋の蒼白い娘——嘗つて塔の影  
の犠牲になつて死んだ少年を助けた女を戀してゐた

舌のもつれるやうな面白い發音に耳を傾けながらだ  
ん／＼部屋の中に忍び込む薄暮の光を苦にし乍ら紅  
絹の布に針を運ばしてゐる女は死んだ少年の薄れ行  
く面影を心の中に描いて、追想の涙にくれてゐた。

荒廢した街に落つる夕日の流れを浴びながら亡き  
友を偲びつゝ、當てもなしに道ふてゐた先の少年は  
この街道に一軒しかない小さな湯屋の前を通りかゝ  
つた時その湯屋の浴槽の中には彼の最も親しい第三

の少年がゐたことを知らなかつた。

浴室はこのやうな古い街に有り勝ちな三方を木理  
の多い杉板で圍んで人の顔も見分け難いほど薄暗く  
外から入つて來るものに、何となく底の知れぬ洞窟に  
入つて行くやうな寂しさを感ぜさせた。それでも水  
槽は花崗石でとり圍まれ浴室と脱衣場との境には硝  
子障子が光つてゐる。

暗い浴室には唯一つの白い裸體が横はつてゐた。  
彼は浴槽の中から立ち上る湯氣に包まれて、酔つたや

うにぼつとして、番臺の方を眺めてゐた。外には街道を過ぐる牛車の轍の響が、小止みなくゴロ／＼と響いてゐる。『時』が絶間なく繰り返すその古い音響は、少年の柔かな脳神経にジワ／＼と侵み入つた。『男』『女』といふ二つの字を白く染め抜いた番臺の赤硝子には、酒のやうに黄ろい夕日がゆらいで、窓の外に黒い木の葉は、顛へる影をその上に落してゐる。赤硝子の音楽は、この古い街に傳へられた、千餘年前の興味深いレゼンドを奏でゝゐるやうに思はれた。

それを凝つと見てゐる中に、少年は自分の脳膜までが真紅になるやうな氣がした。夢のやうに脳膜の赤さが茶褐色にだん／＼醒めて行くと、そこにはHの字やOの字が澤山埋められてゐる。すると彼の脳膜の一部では、今日彼が犯した麥畑の中の罪惡が、鋭い針で刺すやうに踊つてゐた。さうして、終に彼は水槽に湛へた水が、何故水素の二容積と酸素の一容積とから成るかといふ疑問に苦められてゐた。その夜、水銀のやうな月光が、この街道を照らした。

塔と森とは、月光と露とを浴び冷かな空気が、大空に流れてゐた。杉の暗い木立には、梟の鳴く聲——この鳥の聲は、鳥羽野に近い塔と森とを歌はんとする詩人にとつては、見遁すことの出来ぬ奇妙な音楽である——  
が、太い硝子の管を鳴らすやうに響いてゐる。

荒廢した街道に思ひ／＼に小さな寂しい、親譲りの生活を營んでゐる足袋屋、鍛冶屋、鍔の柄を賣る店などは、微かな燈火を掲げて、夜の仕事に忙がしかつた。  
月は、それ等の凡てのものを、涙のやうな光りを以て

包んだ。

夜更けて、鉛色の街道を道ふ一人の少年があつた。彼が晝の間如何なる生活を營んだか、彼の明日の運命は如何に悲しむべきものであるかは、時の進化より尙賢い、豫言者のやうな塔の靈も知ることが出来なかつた。

彼はたゞ一人の少年であつた。彼は凡ての疑問から開放された無上の歡喜に満ちて、月光の浪打つ海中を小躍りして歩んだ。凡てのものが美はしかつた



森を包む土塚の石垣からは、絶えず蛙の鳴聲が聞えた。不圖耳をすますと、遠くから明笛の響が流れて来る。彼は思はず、亡き友を憶ひ起こして、身慄ひしたけれど、その哀音は決して彼の心を悲しませなかつた。少年は地上の歡喜に充ち充ちてゐたからである。彼は亡き友の不幸を思ふよりも、先づ現在の自分の幸福を思はねばならなかつた。

やがて夜の更けるとともに、紗のやうな水蒸氣を通して降りそゞぐ月光は、この幸福なる少年の姿を隠く

してしまつた。月光が彼の幸福を奪つたのである。けれども水の流れるやうな明笛の響だけは止む時がなかつた。古い街道は、こゝに悲愁の雲を以て蔽はれてしまつた。

望樓

海岸には赤黒く塗つた三層建の西洋館が突き立つてゐた。

光る鏡のやうな九つの玻璃窓は海に向つて開かれてゐた。北歐の作家によつて描かれた芬蘭土灣の波のやうに海は濃い紺青色をして、それがギラ／＼光つて窓を覗き込む。胸を刺激する——然し心地よい潮

風は朝も夕もこの家に吹きつける。崖を洗ふ波の音は無限から無限に向つて叫ぶ單調な傳道者の聲のやうにひいてゐた。

砂山がうね／＼と續いてゐる。行廊から庭に降りると葉鶏頭が赤く茂つてゐた。温かい日光が不圖雲間から漏れると、其の花や葉が虹のやうに輝いて、金色の羽虫が幾つも輪を描いて飛び廻る。

私はもう久しく此の家に沈滞した聖者の様な生活

を送つてゐる。海の色にももう親しくなつた。私は過去の惱ましい生活から遁れて此處まで逃げて來たのである。過去の生活と云つてもそれは至極些細なことであつた。女との一寸した關係と……暮し向きの不満と……そんなことが大きな原因であつた。近頃では時とすると、玻璃窓に倚れて、少年時代の穩やかな追憶に耽つて、久しく味はなかつた甘い涙に日を暮すことさへある——恰度自然と云ふものが私を一所に置くのを嫌惡つて、強いて忘れて了つた過去の記憶

へ私を引き戻さうとするやうに。そんな時にはいつも屹度海は和いで穩やかであつた。遠方に霞んで見える岬の白い望樓の屋根には夢のやうな翼の軽い鳥が群れを作つて舞ふてゐる。うつとりとそれを眺めてゐると、いつの間にか強い意識も神経さへも弛んでしまつて涙が頬を傳ふて流れる。空には鳥の翼を断つて投げたやうな白い雲が靜かに回轉りながら東の方

此の家の主人は私にとつては謎であつた。何故彼は、この西洋館を赤黒い嫌な色で塗つたか。さうして海に向つた一つの大きな扉のみ、目醒めるやうな緑色に塗つたかを私は知ることが出来なかつた。彼はまた若かつた。いつも彼は鳶色の洋服を着てゐた。鳶色は COMFORTABLE な色である。私は彼がいつも『幸福』を身に纏つてゐるのだと思つた。彼は親切に毎日私の身體をいたはつてくれた。私は殆んど病人のやうに介抱されつゝあつたのである。その若

い細君は、時々熱い紅茶を入れたり私を搖椅子に腰かけさしてピアノを奏でたりなどして私を慰めてくれた。

再び云ふ。私は聖者のやうな生活を送つてゐたのである。

或る晩主人は柔かいあの同じ懐かしい眼をして私を二階に導いた。二人は玻璃窓に倚つて靜かに話しながら海を眺めた。けれども私達は決して『既往』につ

いて語らなかつた。

海は暗く、波の音は寂しく鳴つてゐた。遠くの望樓には火が點つて、その火は意識のあるものゝやうに揺れてゐる。寂しい胸の中を打ち明けるために高く叫んだならば、何かしら慰めのある言葉で答へてくれるやうに、懐かしく慄へながら燃えてゐる。水平線が稍白んで、限りある水と、限りなき天との夜の接吻を覺束ない色に見せてゐる。さうして其の邊りを大きな汽船が赤と青との航海燈を掲げて、音もなく迂つて行く

と、望樓の火が高く低く動いて、強く岸を打つ波の音が悲哀と歡呼の高い叫びを擧げる。

主人は靜かに語つた。

『私達はもう一度女の愛を眞實に味はなければなりません。私は矢張り女の自然の愛に歸へりたいんです。』

『女ですつて？』

私は斯う叫んだ。

『私が女といふのは、赤坊を生む女といふ意味ではあ

りません。畢竟異性を云ふんです。』

この言葉は私には不思議に響いた。

『では貴郎は何故、こんなに隔離した生活を送つてお出になるんです。』と私は詰問せねばならなかつた。主人は暫く黙つてゐた。さうして最後に斯う云つた。

『私は何かしら新しいものを迎へやうと思つてゐるからです。』

彼は終に謎であつた。神は彼から幸福を奪ひ返へ

して仕舞つたのである。然し幸福といふことは何であらう！

空には何時か星が現はれ、幾千の微かな光芒を放つて、私達の心に寂しく望んでゐた。海の上の暗の中から、淡い四月の空を鳴きながら飛ぶ吐鵝のやうな聲が響いて来る、私達二人は、それが何者の鳴聲であるかを知らうとは思はなかつた。たゞその強い果敢ない響きに聴き惚れてゐた。

その夜私は少しも睡むことが出来なかつた。浪の音が絶えず轟いて、その單調な響を聞くに耐へなかつたともすると、二人の間を繋いでゐた不思議な縁の糸が切れて私が破れた靴のやうに棄て、了つた昔の女の姿が寢床の裾に現はれる。窓掛の細かな摸様が彼の女の髪の毛のやうに亂れる。その瘦せた蒼白い顔は何事かを私に訴へてゐた。

玻璃窓がポツと霞むのを待ち兼ねて私は三階に上つて、西の端の窓に出た。

西の方の岬と望樓とは、また朝霧に包まれてゐた。崖の下に打ちつける浪は、ゆるやかに撞と響いては、静かに砂礫を洗ふて消えて行く。砂山の柔かい線の上には、また未明の眠が漂ふてゐる。

空は飽くまで濃く、蒼く、凝つと黙つて動かない。明星がたゞ一つ、水と丘——凡てのもの、眠を醒ます豫言者のやうに、冴え々々とした光を放つてゐる。階下の寢部屋はひつそりして、物の音も聞えない。主人はまだ寝てゐるのであらう。彼は昨夜静かに睡んだであ

らうか……あの激しい感情を抱いて……天と地とを  
蔽ふ悶えに燃えて……

海の中へ突き出た岬の低い丘の中腹に、白い可憐な  
病院の建物が見える。その前方のバルコンは空虚で  
あつた。私はよく其處に出て海を眺めてゐる不治の  
患者を遠く望む毎に『名は美き膏にまさり死ぬる日は  
生るゝ日にまさる』と叫んだ昔の豫言者の言葉を憶ひ  
出した。この言葉はこの美しい海邊の曙の景色の前  
に、どれだけの意味を含んでゐるのであらうか。  
松林

の中に建てられた海岸測候所の屋根には、薄緑の風見  
車が、カラ／＼と優しい神秘的な響を立て、廻つてゐ  
る。聽てあの人の好い技師の姿が高い觀望臺の上へ  
祈禱をする人のやうに現はれるであらう。彼はもう  
全身を打ち込んで美しい自然と人情とを愛してゐる  
のである。然し彼の聲は無際限に廣い大氣の中に無  
情にもぼかされて、海は何事をも答へない。  
私の心の中には、もう少年時代の甘い追憶は蘇生ら  
なかつた。さうして、またしても昔の女の姿が浮び出



る……私がもう一度、あの女を愛さねばならぬと云ふやうに。けれども私は新らしい何者かを迎へねばならぬ。聲をあげて何事かを叫ばねばならなかつた。霧がだん／＼薄く消えて行くと、海が衣を脱いで鮮やかに現はれた。その紺碧の色を凝つと見つめてゐると、その美しい色が瞳の中に侵み込み、溶けて私の心の中に流れた。望樓が朝の冷かな空氣の中にニョッキと立つて、その下には白浪が泡立ちながら押し寄せてゐる。

### 南の孤島へ

日が暮れかゝる頃から雨が降り出した。汽船發着所の待合室では、薄暗い電燈の光に照された二十人ばかりの今夜の航海者が、解船の出るのを待ちあぐんで、口喧ましく喋つてゐる。幾列にも並べられた長い腰掛の上には、行李や旅行鞆や風呂敷包などが山のやうに積れてゐる。

小さい玩弄物のやうな汽船は、今夜これ等の人々を乗せて都會の河口を離れ太平洋の一孤島に航海するのである。航海者は塵埃と煤と激しい労働とに疲れ切つて、この南方の小島に逃れゆく人々である。その中には傳道師の一群れと、少數の商人と、學生と、腦を病んだ顔色の悪い一人の青年などがゐた。時々沖の方で太い汽笛が聞える。電車の響が遠く聞える。航海者の群れは、狭い待合室で一しきりまた騒ぎ始めた。

降しきる戸外の雨を侵して、二臺の人力車が發着所の入口へ轆棒を下ろした。その車にはT子とその母様が乗つてゐたのである。T子は好奇心に驅られた一人、この人々の群れに交つて南の島へ航海しやうとしやうとしてゐるのである。彼女が薄暗い待合室に入つて來ると、航海者は言ひ合はしたやうに、この無邪氣な少女に視線を注いだ。群集の喧騒は、一時に鳴りを静めた。T子は少しも氣が落ち着かず、恐ろしいものゝ前に出たやうな不安を感じて、たトソワ〜し

てゐた。

お母様は驚きの瞳をみはつてゐた傳道師の群れに  
T子を托した。黒い洋服を着てゐる年老つた傳道師  
は航海の無事なことを神に信頼して親切にお母様を  
慰めた。お母様は一人の外國宣教師と親しきうに話  
をした。

商人の一團は菓子を嚙つたり、煙草を吹かしたりし  
てゐる。その煙が待合室の中に朦々と廣がつた、電燈  
の光が益々薄暗く見える。腦の悪い青年は、敷石の上

に落ちる黒い雨の滴をたい凝つとみつめてゐた。學  
生等はたゞ無暗みに騒いでゐた。——けれども誰れ  
も皆上づつた心の底では、一様に同じやうな不安を感  
じてゐた。

その間にT子は海の上の危険や一人旅の不安を忘  
れて、眼にも耳にも新らしい南方の孤島を心に描いて  
ゐた。

この島を圍繞らす海の色は眞蒼で、砂が白く夏にな  
ると、常に南風が海の上を吹いて來る。島には、椿油と

甘藷とを産する。毎年枇杷の實が熟する頃になると ANKO と呼ばれてゐる島の少女は、繪のやうな島影に彩色つた小さい汽船の着くのを待つてゐる。 ANKO は身体が壯健で、黒い髪は腰の下まで垂れ、皮膚は磨いた林檎のやうに美しい。都會の男と見れば、厚い情に燃えた眼眸と懐しい媚の微笑を送つて、深い戀の思ひに惱まされる。

春も夏も熟せぬ果實の香の高い、そこは『性慾の孤島』である。

『海が荒れは致しませんでせうか？』  
と突然お母様は、心配さうに傳道師の一人に尋いた。

『何、大丈夫でせう！』と黒い洋服が答へる。

『太平洋に出たら少し揺れるかも知れませんが、灣の中は静かなものです。』と今まで何か言ひたさうにしてゐた他の一人が言つた。

『何分娘は生れてからお船はまだ始めてなんですから、どうぞ宜しく願ひます。』

『なあに。酔ふ人は揺れなくても船に酔ふんですか』

らねえ。』

他の一人はかう言つた――

『この間生活に困つて私の家を訪ねて来た青年にいろ／＼説教してゐますと、その青年はどんな宜い錢儲けがあつても仕事をするのが嫌ひだと言ふんです。どんな仕事でも、先づ着手すると直ぐ絶望すると言ふんです。着手と絶望が同時だと言ふんですから、困つた青年ですよ。』

傍にこの話を聞いてゐた脳の悪い青年は『あの娘は

島へ行つて ANKO から何を教はつて来るだらう。戀

愛か？ 深い深い絶望か？』と心の中で思つた。

ガラ／＼と銅羅が待合室に響いた。

出帆の時刻が来たのである。疲れた人々は同じやう

に騒がしく喚きながら改札口を出て、解船に乗り移つた。

雨が止んで夜霧は深く河口を蔽ふてゐた。汽船は頻りに汽笛を鳴らしてゐた。その響が静かな河面を匍ふて、人々の心には不安が漲つた。青い航海ランプ

の光が帆柱の上高く夜霧の中に揺れてゐる。

T子のお母様はたゞひとり舢舨に残された。T子は船室の小さな窓に倚つてだん／＼遠ざかつて行く舢舨を眺め袂から桃色のハンケチを出して人に知れないやうに溢れる涙を押へた。

汽船は霧の中を汽笛を鳴しつゝ静かに動き始めた深い夜霧の中や、乗客の心の中で何者か『WHO KNO WHO?』と低い聲で叫んでゐるやうに思れた。

## 悲 愁

月は黙然と曠野を照らしてゐた。野の雑草は生々とした光を浴びて、黒い手毬のやうな社の森が遠方に霞んで見える。野の端づれには、発電所の煙突が冴えたる。廣々とした野だ。足元では秋から冬に移り行く空に突き立つて方ある物凄く黒煙を思ふ様吐いてゐる。廣々とした野だ。足元では秋から冬に移り行くのを悦んでゐる果敢ない虫が鳴いてゐる。

遠い山の麓を走る汽關車の車輪が地響して長く轟くと、虫の鳴く音が一時にバツタリ止んで了つて野は云ひ合はしたやうな静寂に返へる。すると、一里も二里も先きの方の街から、甲高い細い絶え入るやうな喇叭の音がひゞく。その聲が絃のやうに消えると、また野の虫が幾百、幾萬となく、戀を知らずに嫁いだ母親の心を搔きむしるやうに、男の情を味はずに不治の病を獲た妹を慰めるやうに悲しい唄をうたふ。

月の光は無限の恵を孕んでゐた。その光の露を浴

びると、何者もみな黙つて了はねばならなかつた。聲を擧げて叫ぶことさへ出来なかつた。大きな一株の松の樹は月の光を遮つて、黒い影を地上に落してゐる。その樹には、晝夜間斷なく、食物を運ぶ小さい虫が地上から幹を傳ふて梢まで梢から幹を傳ふて地上までを往來して、苦しい營みをつゞけてゐる。

『私の心も悶えた泣いてゐる』——誰れか、力一ぱいの聲で斯う叫んだ。けれども聲は案外に低かつた。社の森には、深夜の靄が降りた。野の雜草は、強い呼吸

を密かに吐いてゐる。  
 空には、二條、三條乳色の雲が流れてゐる。聽て月は  
 その影に隠れるであらう。絶望者の悲しい心は、ひつ  
 そりと黙してしまふのであらう。

明治四十五年一月十三日印刷  
 明治四十五年一月十六日發行

習作 二十七篇 散文詩集

著者

福永挽歌

發行者

岡村庄兵衛

印刷者

今井萬之助

不許複製

(正價金十四錢)

發行書肆

岡村盛花堂

東京市淺草區下平右衛門町九番地  
 電話 下谷 四二〇六  
 板橋 東京 一九〇六



紅

噴

隨

筆

兒玉花外著

花外氏の赤熱の文章は天下一品なり、  
花と紅葉と人生を色彩するに純烈な  
る感情を以てす、此書冷き現代を噴  
火的に裝飾するに足る、乞ふ一氣揮  
掃の快文章を見よ。

定價金四拾錢

郵税金六錢